

## 第四節 根府川<sup>ねぶがわ</sup>の鹿島踊

### 1 伝承地について

#### (1) 伝承地の概略

根府川は、小田原市の南部に位置する。JR東海道線小田原駅から熱海駅方面に二駅進んだ根府川駅が集落の玄関口となっている。根府川駅は、相模湾をのぞむ眺望で知られており、無人駅ながら関東の駅百選にも選ばれている。その駅舎を出て、県道七四〇号小田原湯河原線を湯河原方面に一五〇メートルほど進むと、鹿島踊が行われている寺山神社に到着する。

近世期において根府川は、小田原藩に属し、廣井長十郎家が名主を世襲していた。廃藩置県以降、小田原県、足柄県を経て、神奈川県に属している。明治九（一八七六）年に、石橋、米神、江之浦、早川とともに組合村となるが、大正二（一九一三）年に早川村以外の四ヶ村が分離、片浦村が発足する。昭和二九（一九五四）年、片浦村は小田原市編入のため廃止、以後、小田原市根府川として現在に至っている。

交通は、近世期より東海道の脇往還である熱海往還が根府川村内を通っていた。明治二九（一八九六）年三月に小田原と熱海をつなぐ豆相人車鉄道が開通し、根府川にも停留所が設けられた。人車鉄道とは、人力で客車を押す鉄道である。明治三九（一九〇六）年一〇月に、豆相人車鉄道は熱海鉄道と改称され、小さな機関車で客車を引く軽便鉄道となった。大正一一（一九二二）年一二月には、現在の東海道線となる熱海線が真鶴駅まで延伸して、根府川駅が営業を開始した。このときに、軽便鉄道は廃止されている。

大正一一（一九二二）年九月、関東大震災が発生し、根府川集落は甚大な被害を受けた。地震のため根府川駅に入線しかかっていた下り列車が脱線転

覆した。その直後、地滑りが発生し、根府川駅ごと海に流された。この根府川駅列車転落事故だけで一三〇人以上が亡くなった。さらに、その後の余震で根府川集落を流れる白糸川の上流にある大洞山が崩落し、集落がのみこまれた。内田一正によると、この「山津波」によって、七八戸の家屋が埋没し、二八九人が亡くなっている。鉄道は震災の翌年、大正一三年に七月に再開するが、集落の復旧は昭和二（一九二七）年ごろまでかかったという。

#### (2) 暮らしの移り変わり

根府川は、海と崖に挟まれており、農地に適した平坦な土地が少ない。そのため、水稻を栽培するのが困難であった。

産業としては、近世から石材業が行われており、「根府川石」と呼ばれる石を切り出し、海運によって真鶴を経て江戸まで運んでいた。近代以降も根府川駅から鉄道で石が出荷されたが、昭和戦前期以降は需要が減少し、多くが農家に転じた。

漁業は、明治三〇（一八九七）年ごろは村で五隻の船を持ち、網を張っていたが、明治三五（一九〇二）年に大暴風雨に遭って衰退する。その後、大正八年に五隻操業の大規模な網になるが、漁区域拡張のため、大正一一（一九二二）年に江之浦組合に合同している。

農業で主要な産物は何といってもミカンである。ミカンの栽培は近世から行われ、安永年間（一七七二―一七八一）に紀州からやってきた住職が苗木を持参したとも、文政年間（一八一八―一八三〇）に熊本から転じた小田原藩士が原木を持ち込んだとも言われている。明治以降、栽培面積は拡大し、根府川の特産品となった。

平成三（一九九一）年にオレンジの輸入が自由化されることとなり、全国

的にミカン農地の転換が促進された。根府川では雇用促進事業団に対して勤労者リフレッシュセンター建設の誘致が行われ、平成一〇（一九九八）年にリゾートホテルのスパウザ小田原がオープンした。現在は運営者が変わり、ヒルトン小田原リゾート&スパとして営業している。

根府川地区の人口は、平成二七（二〇一五）年の国勢調査によると、六二一人（二四三世帯）である。平成一七（二〇〇五）年の国勢調査では七二一人（二五二世帯）であったことから、減少傾向にあると見てよいだろう。産業構成では、就業者三〇七人中、農林業に従事する人が五四人ということで、現在も農業が盛んな土地柄である。

集落の片浦小学校は、かつての片浦村である石橋、米神、根府川、江之浦の各地区を学区としている。平成二四（二〇一二）年より小規模特認校となり、小田原市全域から児童を受け入れることとなった。令和三年四月の時点で児童数は八七人で、学区外から片浦小学校に通う児童が鹿島踊や福踊りなど根府川地区の行事に参加することも増えている。

### （3）神社の由来と伝承地の信仰

鹿島踊が行われている寺山神社は、小田原市根府川九五番地一にある。祭神は武甕槌命で、由来は詳細にはわかっていない。明治以前は寺山権現と称したが、明治元（一八六八）年に寺山神社と改めている。浜田和政によると、もとは現在よりも海岸に近いところにあったが、大正九（一九二〇）年に鉄道開設のために現在地へ移った。その後、大正一二（一九二三）年の関東大震災で被害を受けたため、現在の社殿はその後改修されたものである。

## 2 祭礼について

### （1）祭礼名

寺山神社祭禮

### （2）期日

七月第三土、日曜日。

### （3）祭礼の概要

現在は、七月の第三土曜日に夜宮祭（ヨミヤ）、翌日の日曜日に祭礼を行うことになっている。しかし、平成三〇（二〇一八）年は第二土日曜日にあたる七月一四日一五日に、平成三一（二〇一九）年も第二土日曜日の七月一三日一四日に行われた。昭和四〇（一九六五）年代に週末に祭礼を行うようになったが、それ以前は七月一五日に祭礼を行っていた。もとの祭礼の期日である七月一五日に近い週末を選んでいると言ったほうが正確であろう。大正一二（一九二三）年の関東大震災以前は「お浜下り」が行われていたが、途絶えている。また、昭和一〇（一九三五）年代までは、神輿と鹿島踊のほかに万灯が出ていた。昭和三〇（一九五五）年代前半に祭礼を四月に移動した時期があるが、すぐに七月に戻されている。

### （4）構成と進行

祭礼の一週間前から鹿島踊とシャギリ（山車の上で演奏される屋台囃子）の練習が行われる。練習は月曜から金曜までの毎日、午後七時から寺山神社の向かいにある根府川公民館で行われ、二階でシャギリ、一階で鹿島踊の歌上げ、庭で鹿島踊にわかれて練習する。雨天の場合、鹿島踊の練習は片浦小

学校の体育館を借りて行われる。

鹿島踊の練習は、踊りを覚えていない子どもたち、踊りを覚えている子どもたち、踊りの中心となる三役の三グループに分かれて練習し、最後に全員で合わせて通す。子どもたちも見よう見まねで大まかな振りは一週間で覚えられるようだ。練習は一時間程度で終了し、大人たちは缶ビールを一杯飲みながら三役を中心に細かな振りを確認して解散となる。

土曜日の夜宮祭では、午後五時三〇分ごろに、トラックを飾った山車にシャギリをのせて寺山神社を出発し、地域内を一周する。山車が寺山神社に戻ってきたあと、午後七時三〇分ごろから寺山神社で鹿島踊が踊られる。これは現地では「ヨミヤの鹿島踊」と呼んでいる。



写真1-4-1 根府川駅前から山車を引く (館野撮影 2019年)

日曜日の祭礼当日は、午前

九時ごろに神主がやってきて、鳥居の前で一年以内に家族の亡くなった祭礼参加者のお祓いをする。その後、本殿内に神主と子ども会の児童を含む祭礼参加者が集合して神事を行う。午前一〇時ごろに鹿島踊を踊る。これを「出の鹿島踊」と呼んでいる。

「出の鹿島踊」が終わると、神輿と山車が寺山神社を出発し、地域内を巡行する。大人が担ぐ神輿は一基である。神

輿は上下にはげしく揺すられながら境内を一周したのち、神輿の進路に塩を撒く人、高張提灯を持つ人に先導されて、神社の外へ出ていく。神輿は、全行程で神輿を担ぐわけではなく、途中はトラックに乗せるため、神輿と担ぎ手に乗せるトラックが一台ずつ、神輿の後に続き、さらにその後ろにシャギリを乗せた山車が続く。大人の神輿に続いて、ひとまわり小さい三基の子ども神輿が神社を出発する。なお、令和元(二〇一九)年は雨天のため、子ども神輿の巡行は中止された。

午後三時三〇分ごろに山車が根府川駅前に着くと合図の花火があげられる。ここから山車のトラックの前方に綱を掛けて、子どもたちが寺山神社まで引つ張る。二〇分ほどかけて山車が神社まで到着するころに、神輿も神社の近くまで戻ってくる。

神輿は、途中の民家や商店に突っ込んで、その寸前で止まるという荒っぽい担ぎ方で進んでくる。鳥居の前では、神輿を担がない年長の人びとが待ち構え、神輿が鳥居をくぐろうとするのを止める。このやりとりを何度か繰り返したのちに、神輿は鳥居をくぐる。社殿に入ろうとする際にも同様のやりとりを行い、午後四時三〇分ごろによりやく神輿が神社本殿に戻



写真1-4-2 神輿を社殿に押し込む (館野撮影 2019年)

る。午後五時ごろから、「納めの鹿島踊」と称する三回目の鹿島踊が踊られる。その後、地区代表者のあいさつがあつて、祭礼の次第は終了する。

### 3 鹿島踊について

#### (1) 由来と意味

根府川の鹿島踊では、踊りに先立って、子供会の小学生が鹿島踊についての説明文を朗読する。そこでは、「根府川は石材の産地であり、石材運搬船に関わる人が多く、船や海、航海に関わる鹿島信仰が定着し、鹿島踊が伝えられた。航海安全、悪疫退散、豊漁祈願を願う神事舞踊である。」と説明されている。

根府川の鹿島踊は、江戸時代中期以降に、湯河原町の吉浜から神輿とともに伝えられたと言われている。昭和初期に吉浜で鹿島踊が途絶えそうになったときには、根府川から指導に赴いている。このことから、吉浜と根府川の鹿島踊は近い関係にあると考えられている。浜田和政によると、近世期においては石材海上輸送の出航時に「出の鹿島」、村外に悪病神を退散させる時には「送り鹿島」、願い事成就としては「納めの鹿島」として踊られ、明治期以降もコレラやチフスの流行時に鹿島踊を踊って悪病神を村外に退散させたという。現在は、祭礼や芸能大会などで踊られるのみで、特別な機会に願掛けで鹿島踊が踊られるということとはなくなっている。

#### (2) 踊り手とその組織

現在、根府川の鹿島踊は、寺山神社鹿島踊保存会を中心に、根府川地区子供会の小学生が踊りに、保護者が歌上げに加わる体制で行われている。保存会の構成員は、根府川地区の成年男性に限られている。子供会には地域に住

む児童のほか、学区外から片浦小学校に通学している児童も参加することができる。子供会の小学生は、性別に関係なく鹿島踊の輪に加わる。歌上げに参加する保護者は、特に取り決めがあるわけではないが、母親がほとんどである。

役割は、踊り手の他に、踊りの輪の内側にいる、太鼓、鉦、三役、踊りの輪の四隅に立つ警護、踊りの輪の外側で歌を歌う歌上げに分かれている。太鼓は、踊りの輪の中心で締太鼓を叩き、指揮者的な役目を果たす。一名だが、激しい振りでたたためか、途中で交代する。鉦は二名である。太鼓とともに輪の中心でリズムを踊り手に伝える。三役は、太鼓と鉦の外側で、それぞれ一名ずつ、黄金柄杓、日形、月形という採物を持って踊る。踊りの中心となる太鼓、鉦、三役は保存会の二〇代から四〇代くらいの人びとによって担われている。

踊り手は、保存会員と子供会の児童が担当している。現在の祭りでは人数の上限は決まっておらず、令和元(二〇一九)年の「出の鹿島踊」では、保存会員一三名、子供会の児童四二名の計五五名が踊った。

警護は四名で、竹の棒を持って、踊りの輪の四隅に見守るように立つ。保存会の年長者にあたる人たちが担当している。

歌上げは、本殿前の階段に整列して歌をうたう。保存会の長老格にあたる人がリードし、子供会の保護者がついていくような歌い方になっている。定数はなく、令和元年の「出の鹿島踊」では、保存会員三名、保護者一七名の計二〇名であった。

#### (3) 衣装

宵宮、祭礼を通して、成年男性の祭りの装いは、「ねぶかわ」と染め抜い

た地区揃いの浴衣が基本となる。兵児帯を使ってゆるめに着こなすのが特徴である。根府川では、宵宮から祭礼まで三回、鹿島踊が踊られるが、それぞれの回で装いが異なる。

「ヨミヤの鹿島踊」では、保存会の大人は浴衣、子供会の児童は普段着に半纏を着る。三役は、尻端折りにして白足袋をはく。足袋はだしで草履等にはかない。太鼓、鉦は三役と同様の装いに加えて、桃色のタスキをかける。

翌日の祭礼では、神輿を担ぐ大人は白張を着て、頭にはねじり鉢巻きを締める。神輿を担がない年長の保存会員は地区の浴衣を着る。子どもたちは白いTシャツのうえに半纏を着る。黒いハーフパンツに白い靴を履いて、頭にはねじり鉢巻きを締める。

「出の鹿島踊」では、大人も子どもも踊り手は、神輿を担ぐ格好で鹿島踊を踊る。太鼓、鉦は桃色のタスキをかける。全員、烏帽子をかぶらず、子どもは白張を着ない。警護の年長者は地区の浴衣の上に袴と袴を着け、一文字笠をかぶる。歌上げの保存会員は地区の浴衣のまま、子供会の保護者は普段着の上に半纏を羽織る。

「納めの鹿島踊」で大人の踊り手は、「出の鹿島踊」と同様に、白張を着て、頭には烏帽子をかぶる。子どものうち、高学年は大人と同様に白張を着て、烏帽子をかぶる。中学年以下の子どもたちは「出の鹿島踊」と同様の格好である。警護、歌上げの装いは、「出の鹿島踊」と共通である。

(4) 採物、楽器

踊りでは、役割ごとに採物が決まっている。踊り手は、左手に「ヘグシ」と呼ばれる幣束を持ち、右手に日の丸の描かれた扇子を持つ。内側の輪の者は赤い紙垂れ、外側の輪の者は白い紙垂れの付いたものを用いる。

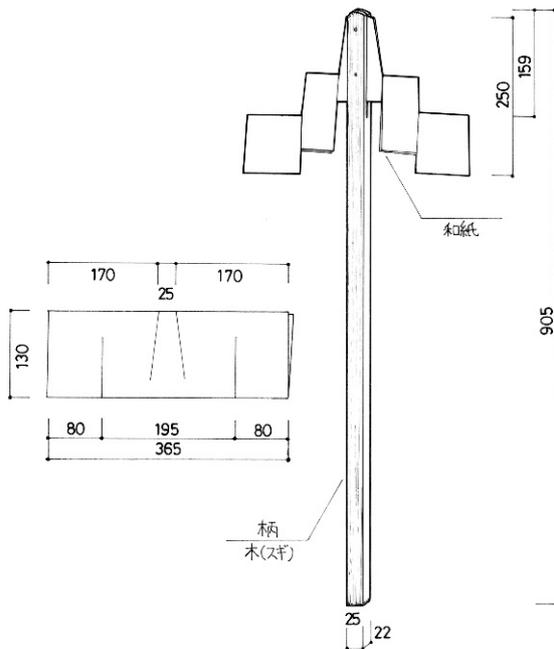


図1-4-2 ヘグシ (外側の輪)

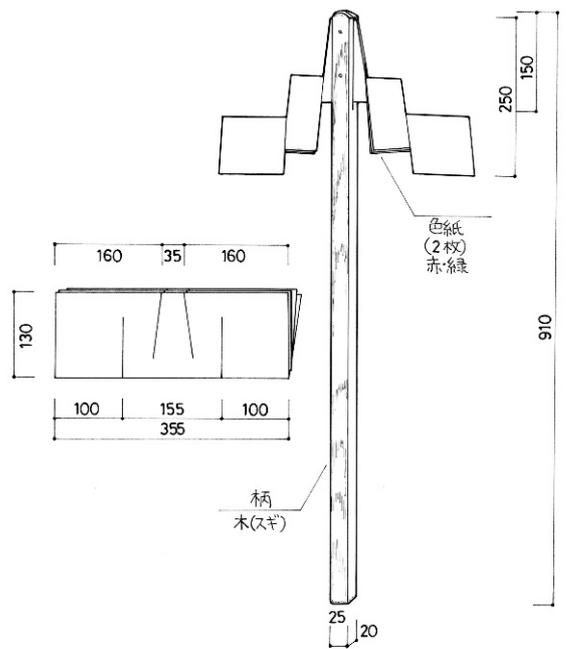


図1-4-1 ヘグシ (内側の輪)

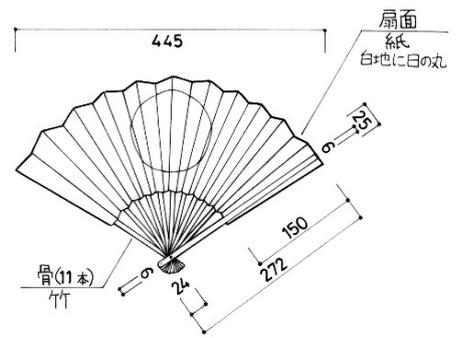
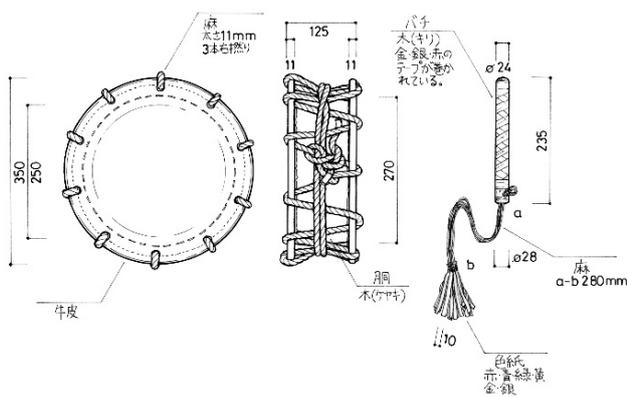


図1-4-3 扇

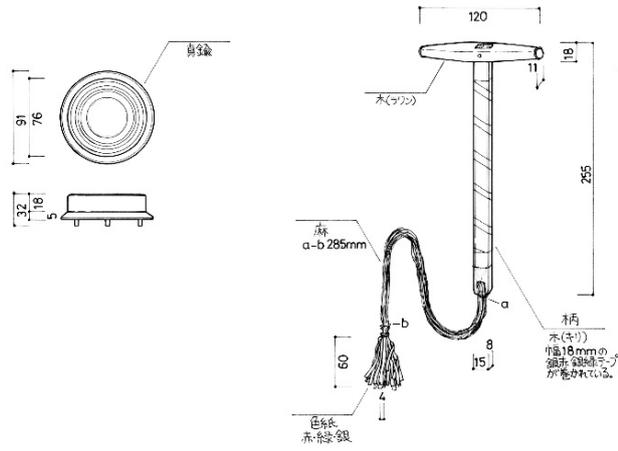


図1-4-4 (上) 太鼓と撥、(下) 鉦と撞木

太鼓は、左手に締め太鼓、右手に撥を持つ。鉦は、左手に鉦、右手に撞木を持つ。  
 三役は、それぞれ左手に黄金柄杓、日形、月形を持ち、右手には日の丸が描かれた扇子を持つ。黄金柄杓は、単に「黄金」とも呼ばれ、九〇cmほどの木の棒に、五色の色紙で飾った器がついている。器のなかには色紙を細かく切った「ヨネ」と呼ばれるものが入っており、踊りながら振ると地面にまか

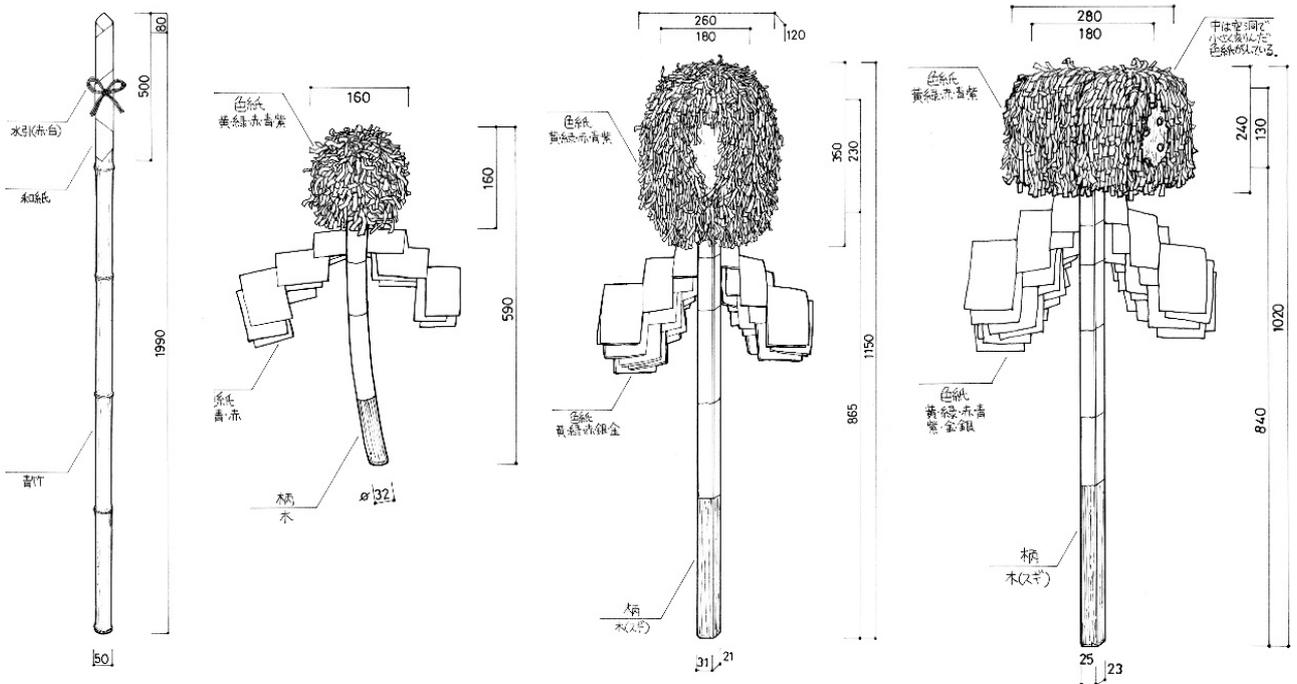


図1-4-5 (左から) 警護の棒、月形 (マラ・マラボウ)、日形 (サネ・カガミ)、黄金柄杓 (黄金)

れるようになっていいる。日形は、木の棒にしゃもじを模した飾りがついており、「サネ」とも呼ばれている。月形は、木の棒にすりこぎを模した飾りがついており、「マラ」とも呼ばれている。

警護は先端に紙の巻かれた青竹を持つ。

### (5) 歌詞

祭礼の際には、境内に大きな文字で歌詞が書かれたベニヤ板が三枚、掲出される。看板に書かれた歌詞には、傍線、傍点が付えられており、踊りのパターンや隊形の変化のしるしになっている。傍線の部分で「ソコソコ」の振りが入り、傍点の部分で隊形を変化させる。板に書かれた歌詞は以下の通りである。

一、誠やら鹿島の浦に

御碌お船がついたやら

二、ともえには伊勢と春日の

中は鹿島の御社

三、天竺の雲のあいから

十作姫が米を蒔く

四、その米を何と蒔き候

御碌続きの米を蒔く

五、十七が沢に下りて

黄金びしゃくで水をくむ

六、水くめば袖ぬれ候

たすきがけさえあいの十七

七、鹿島では稚児が踊る

御萬燈では護摩をたく

八、その護摩を何とたき候

日本御祈禱の護摩をたく

九、天竺は誓が上下

たたらふむが聞ゆ

十、そのたたら何とふみ候

たたらたたらとやつふむ(オヘヤ)

鹿島踊ではことばを長く引き延ばして歌うため、歌上げを担当する人びとは掲示されている歌詞とは別に、ひらがなで書かれた歌詞を見て歌っている。歌上げの練習で使われている歌詞を以下に示す。

一、まーとお おおんやあ あーらああなえか あーあああ あえし(あー

そーれい)

まーのおうーうーうらあにこおーんそ おーおーえー

みーいいいろお おーくううおおおーふーねー(あーそーれい)

ねーがあつうーうう うううういーい いたえと

二、とーもーええええに いーいーはなあえいーいえい

せーとおおかーあ ああすがあああーの おーおーえー

なーあああああ あーはあああああ あーしーま(あーそーれ

い)

まーのーおおお おおおーん やあーしーろ

三、てーんじーいーくう うーのーなあえくううーうえも(あーそーれ

い)

もーのーあーいいーかああら おーおーえー

じゅううー うーさあくううーひいめ (あーそーれい)

めーがーよおおおーおーねーえーまえく

四、そーのーよおおおねえ えーをーなあえなーあえな

にーとをまああーあきーいそうろ おーおーえー

みいいろお おおくうつうーづーうき (あーそーれい)

きいのおよおおーおーねーえ えーまえく

五、じゅうしいーちーい いーがあなーさあ あーあえな (あーそー

れい)

わーにーおーおお おーりいてえーんーよ おーおーえー

こおおーおーがああーねえべええーしゃーく (あーそーれい)

くうでえみいーいーずう うーくえむ

六、みいずうくーうーめえ えーばーなあそおーおーおえも

でーはあぬう うれそうろ おーおーえー

たああーすう うーきいかあーけーさ (あーそーれい)

あーいーじゅううーうーうー ううしち

七、かあしまあああーでえ えーはなあえちいーいーいえい (あーそ

ーれい)

ごーがーおーおおおーおーどおるうーよ おーおーえー

ごーおーまあ あーんどうおー おーで (あーそーれい)

でえはあごおー おーおーまあーあーたえく

八、そーのーごーおおーまー あーをーなあえなーあえな

にーとおたーあ ああーきいそうろ おーおーえー

にいーほおお おーんーごーおおーきーいと (あーそーれい)

とおのおごーおー おーおーまあーあーたえく

九、てーんーじーいいいくう うーはあなあえちいーいーいえい (あー

そーれい)

いーがーあーあーじようおおーよ おーおーえー

たああーあー たああーらあーふうーうむ (あーそーれい)

むーがーきいーいーこーおー おーゆる

十、そーのーたああーたあ あーらあーなあえなーあえな

にいとーおふーう うーみいーそうろ おーおーえー

たああーあーたあ あーらあーたああーたああーらあ (あーそーれい)

らあとおやああーあーあーつう うーふえむ オヘヤ

#### (6) 全体の流れ・道程 (主な踊

りの場)

すでに述べた通り、現在の寺山神社の祭りでは、宵宮、祭礼を通して、鹿島踊が三回踊られている。いずれも寺山神社の境内で行われ、踊りがはじまる前に子供会の児童による解説がある。各回で踊りの振りは変わらないが、衣装や構成の面で異なる。

「ヨミヤの鹿島踊」では、踊り手の衣装は浴衣で、烏帽子はかぶ



写真1-4-3 ヨミヤの鹿島踊 (館野撮影 2019年)

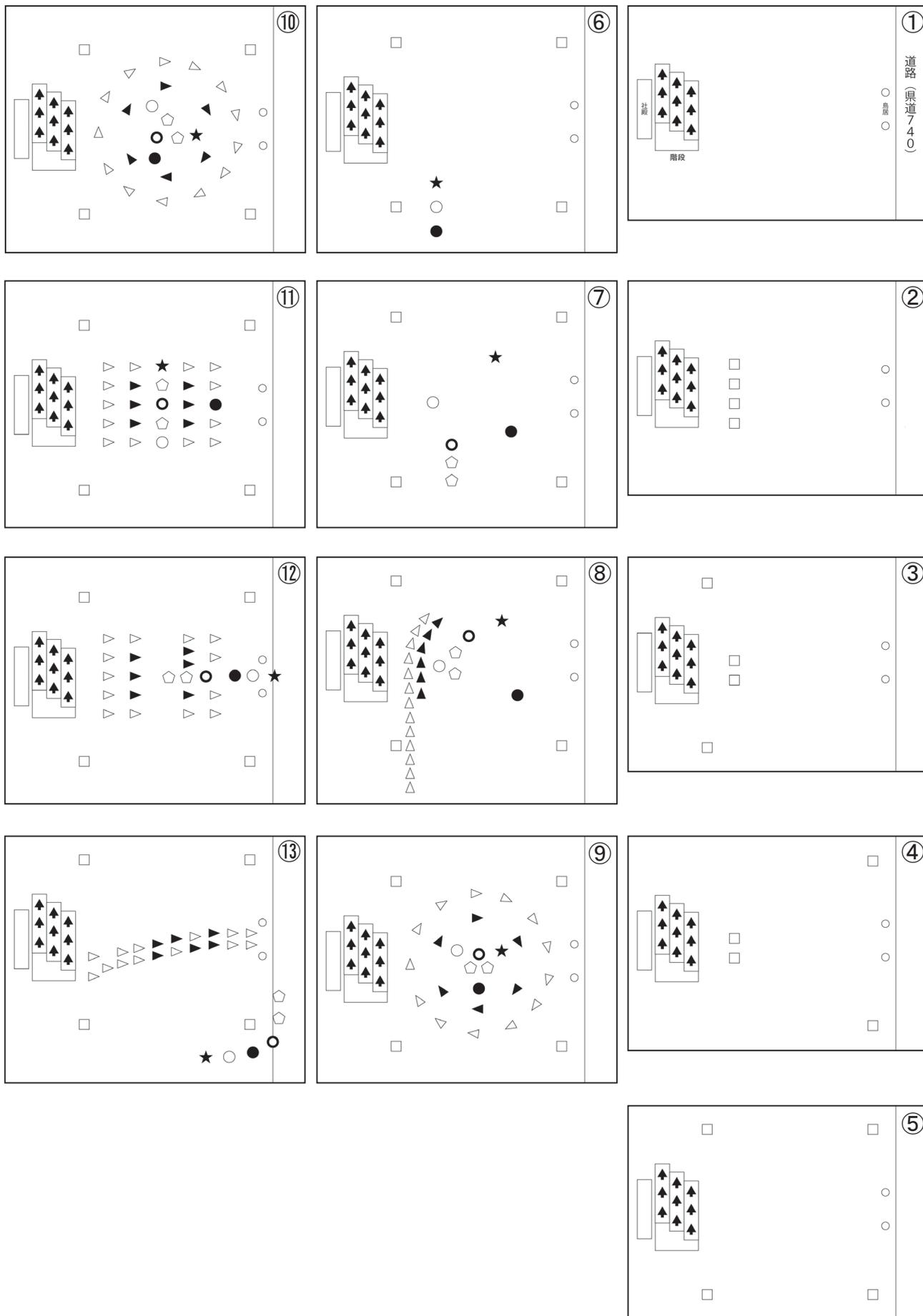


图1-4-6 根府川鹿島踊隊形图

らない。警護は出ない。列形になる際には、社殿の方向を向く。歌は一番から一〇番まで踊り、場合によってはそれを二セット繰り返すこともある。

「出の鹿島踊」で、踊り手は白張を着るが、烏帽子はかぶらない。列形になる際には、鳥居の方向を向く。歌は一番から六番までと短い。踊りが終了すると、踊り手たちは鳥居から退場する。

「納めの鹿島踊」で踊り手は白張を着て、烏帽子をかぶる。列形になった際には、「出の鹿島踊」とは逆に社殿の方向を向く。歌は一番から一〇番までを踊り、方舞の形で終了する。

#### (7) 踊りの所作と隊形変化

**入場** 歌上げが社殿前の階段に並ぶ。警護、太鼓、鉦、三役、踊り手は、境内の西側に待機している。

まず、警護が先端に紙を巻いた竹の棒を持って、境内の真ん中に進み出て一礼する。四隅に塩を撒いたのち、竹を地面に突き立てて、境内の内側を向いて立つ。

続いて、黄金柄杓、日形、月形の三役が時計回りで円を描きながら入場する。太鼓と鉦が後に続き、三役の内側に入る。さらに踊り手が後に続き、二重の輪を作る。

**神おろしの歌** 輪の形が整うと、太鼓が叩かれ、つづいて鉦が同一のリズムで打ち鳴らされる。踊り手たちは、左足を伸ばし、右足を折ってしゃがむ。

三役は左足を伸ばし、右足に重心を乗せて立ち、採物を垂直に立てて輪の内側にかざす。かたちが整うと、太鼓と鉦が一度打ち鳴らされ、三役が「神おろしの歌」をうたう。歌詞は、「千早降る、神々を御諫めなり、弥勒踊り、めでたや、ハアー」で、歌に合わせて三役と踊り手は扇子で輪の内側をあお

ぐ所作をする。

**隊形の変化** 歌が終わると、三役の「アラ」の掛け声で、太鼓と鉦の音に合わせて、踊りと歌が始まる。テンポは太鼓がリードするが、厳密には合わせず、リズムにはふくらみがある。歌上げは保存会員がリードし、少し遅れて子供会の保護者がつづくため、こちらもしリズムにふくらみがある。

踊りは「輪踊り」と呼ばれる円形の踊りから始まる。太鼓に合わせる基本のパターンを繰り返すが、奇数番を歌い終わると、三役が「ソッコ」という掛け声をかけ、それに合わせた振りが挿入される。

四番を歌い終わると、三役が「アラ」と掛け声をかけ、「サク踊り」と呼ばれる列形に隊形を変化させる。列の向きは踊りの機会によって異なる。「ヨミヤの鹿島踊」と「納めの鹿島踊」では社殿を向いて踊り、「出の鹿島踊」では鳥居を向いて踊る。鹿島踊は五行五列が定数であると言われていたが、現在の根府川では定数よりも多い人数で踊る。そのため、列の人数は決まっておらず、五行が優先されている。列形では、三役と太鼓、鉦の位置が決まっている。月形は最前の行の中心に立つ。三行目の中心に太鼓が立ち、その隣に鉦が立つ。鉦の左側に黄金柄杓、鉦の右側に日形が立つ。その他の踊り手たちは、列形になった時にどの位置に立つかは特に決まっておらず、臨機応変に隊形を変化させる。



写真1-4-4 納めの鹿島踊での神おろしの歌 (館野撮影 2019年)

「出の鹿島踊」では、歌詞の六番を歌い終わると、三役の「オヘヤ」の掛け声が掛けられて踊りが終了する。三役を先頭に、太鼓と鉦、踊り手の順番に列を作って、鳥居から退場する。このとき、太鼓と鉦が叩かれるが、踊り手たちはそのリズムに合わせて、幣束を閉じた扇子でたたきながらにぎやかに練り歩く。

「ヨミヤの鹿島踊」と「納めの鹿島踊」では、六番を歌い終わると三役が「アラ」と掛け声をかけ、円形に戻る。八番を歌い終わると、再び列形に変化する。一〇番を歌い終わると、三役の「オヘヤ」の合図で踊りが終了し、太鼓と鉦が打ち鳴らされる。踊り手たちは方舞の形のまま、退場せずに、地区の代表の挨拶を聞き、万歳三唱をする。

### 踊りのパターン

根府川の鹿島踊は円形、円形の「ソコソコ」、列形、列形の「ソコソコ」の四パターンから構成されている。以下に基本パターンを示す。

### 円形

- ① 体を輪の内側に向けて両足を適度に広げて立つ。左手に幣束を持ち左肩に担ぐ。右手は右上にあげて、扇子は下向きに構える。
- ② 右足をあげ、左足と交差させて、輪の進行方向に進める。このとき右手を左下に振り下ろし、扇子は上向きに返す。
- ③ 左足を右足の左側に突き、反動で浮かせて、右足に体重を移動させる。右手は腹の前で扇子を上向きに構える。
- ④ 左足を突いた位置に着地させ、それを軸として体を反時計回りに回転させ、体を輪の外側に向ける。回転する際に、両手は上に向けて開き、右手の扇子は上に向ける。

- ⑤ 右足を着地させる。右手は腰の後ろに移動させ、扇子は上向きに構える。
- ⑥ 太鼓と鉦と掛け声に合わせて、両手を腹の前で合わせ、直後に右手を勢いよく振り下ろす。
- ⑦ 右足を軸に時計回りに体を回転させ、体をふたたび輪の内側に向けて、①のかたちにくつくりと戻す。

### ソコソコ（円形）

- ① 右足を左足の前に交差させるように出す。右手は右下におろし、扇子は下に向ける。
- ② 右足を軸に時計回りに回転し、体を輪の外側に向ける。
- ③ 「そこやれ、そこやれ、そこやれ」の掛け声に合わせて、足を右足、左足、右足の順に後方へ跳ね上げる。このとき、右手は跳ね上げた足の方向に払う。
- ④ 「そこやれ」の掛け声に合わせて、右足を軸に反時計回りに回転し、体を輪の内側に向ける。右手は腹の前に出し、扇子は地面と平行に構える。
- ⑤ 右足を後方に引いて、胸を開き、右手を右方向に伸ばす。
- ⑥ 円形の①のかたちに戻す。

### 列形

- ① 体を正面に向けて両足を適度に広げて立つ。左手に幣束を持ち左肩に担ぐ。右手は右下に自然におろし、扇子は下を向ける。
- ② 左足に重心を移動し、右足を浮かせる。幣束を肩からはずし、上を向けながら右側に移動させる。右手は左手に添わせるように振り上げる。
- ③ 右足を着地させ、幣束を左肩に戻す。右手は腹の前に構え、扇子は上を向ける。
- ④ 反動をつけながら、重心を左足から右足に、右足から左足に移動させる。



写真1-4-5 出の鹿島踊 (館野撮影 2019年)



写真1-4-6 納めの鹿島踊 (館野撮影 2019年)

- ⑤ 両足を着地させる。右手を体の右下に振り下ろし、扇子は下を向ける。
- ⑥ 太鼓と鉦に合わせて、扇子を胸の前に振り上げ、その直後に右下に振り下ろし①のかたちに戻す。

#### ソコソコ (列形)

- ① 右足を左足の前に交差させるように出す。右手は右下におろし、扇子は下を向ける。
- ② 右足を軸に時計回りに回転し、体を後ろ側に向ける。
- ③ そこやれ、そこやれ、そこやれ」の掛け声に合わせて、足を右足、左足、右足の順に後方へ跳ね上げる。このとき、右手は跳ね上げた足の方に払う。

- ④ 「そこやれ」の掛け声に合わせて、右足を軸に反時計回りに回転し、体を正面に向ける。右手は腹の前に出し、扇子は地面と平行に構える。
- ⑤ 右足を後方に引いて、胸を開き、右手を右方向に伸ばす。

- ⑥ 列形の①のかたちに戻す。

#### 三役、太鼓、鉦

三役の踊りは、その他の踊り手と基本的には共通であるが、踊り手は基本的に幣束を肩に担ぐところを、三役はそれぞれの採物を地面に対して垂直に立てて構えるところが違っている。特に黄金柄杓は、手首を回転させてヨネを地面に振り撒く。太鼓と鉦の足の運びはその他の踊り手とほぼ共通しているが、円形の際には輪の外側を向かない。太鼓は叩くごとに、体をかがめてから、仰向けに上半身を伸ばし、その動作と同時に左手に持った締太鼓をクルクルとまわす。

#### 4 伝承内容の変遷

##### (1) 伝承の基盤、背景、生業

浜田和政によると、大正二二(一九三三)年の関東大震災の前には、まず、七月七日に寺山神社境内の天王社の宵宮である鹿島踊を奉納してから、祭礼に神輿を出すかどうかを決めた。神輿を出す年には、七月一四日の早朝に境内に鎮西三郎為朝の人形を飾り付けた万灯を立てる。その日の午後には、宮出したした神輿と万灯を押し合い、ぶつけ合いながら、浜の社地へ下りてゆく「お浜下り」が行われた。この形式の「お浜下り」は関東大震災以降、昭和四(一九二九)年に行われてから途絶えている。昭和一〇(一九三五)年代までは、大太鼓、袖、鉦、御旗、万灯、神輿、鹿島踊の青年衆の順番で神輿の巡行が行われていた。万灯は花山車とも呼ばれ、大掛かりなものであったと思われるが、姿を消している。現在のトラックに飾り付けをした山車は、昭和五〇(一九七五)年ごろに復活したものである。

昭和四〇(一九六五)年代までは、神輿の出る大祭(おおまつり)と、神

輿を出さない居祭（いまつり）を隔年で行っていた。大祭の年には、宵宮の日に青年団の寝宿で一回、神社で一回、鹿島踊が踊られ、祭礼当日は神輿の出発前に「出の鹿島踊」を一回、神輿巡行中には、根府川駅、関所跡、釈迦堂、総代の家の前など五、六ヶ所でも踊られ、神輿が神社に到着してから「納めの鹿島踊」を踊った。居祭の年は、宵宮に寝宿で一回、祭礼当日神社で一回踊るだけであった。ミカン栽培の都合や食べ物のいたみを考慮して、昭和三〇（一九五五）年代前半に三年程、祭礼を四月に移動した時期があるが、すぐに七月に戻されている。現在のように、週末に祭礼を行うようになったのは、昭和四〇（一九六五）年代以降である。

小学生が参加するようになったのは、昭和五〇（一九七五）年代以降である。当初は小学四年生以上の男子に限られていたが、昭和六〇（一九八五）年代には小学三年生以上で性別問わず参加するようになった。現在は、根府川地区の子供会に所属する小学生が踊り手として参加している。根府川地区の子供会には、学区外から小規模特認校である片浦小学校に通っている児童も加入できることもあり、保存会の大人よりも小学生の人数のほうが多くなっている。

## （２）文化財指定とその影響

根府川の鹿島踊は、「寺山神社の鹿島踊り」として、昭和四六（一九七一）年三月三〇日に神奈川県無形文化財に指定された。昭和三一（一九七六）年には、無形民俗文化財に区分が変更されている。

## （３）外部公演などの上演機会

昭和三八（一九六三）年一〇月一二日、静岡県静岡市駿府会館で開催され

た関東ブロック民俗芸能大会に出演している。永田衡吉は、戦中の物資不足の折に神社にしまつてあつた白張が盗まれたため、浴衣で踊っていたが、この民俗芸能大会に出演する際に衣装を新調したと記述している。昭和一〇（一九三五）年生まれの話によると、民俗芸能大会出演に際して、永田の助言があつて、衣装を調べたという。また、この民俗芸能大会の前は、現在のように警護がなかったが、これも永田の助言でつけるようになった。この公演のパンフレットに掲載されている写真で踊り手は、浴衣の上に白張の上衣のようなものを着て、扇子ではなく日の丸の描かれた団扇を持ち、頭には鉢巻きを巻いている。出演時の記念写真では、踊り手は現在の白張に烏帽子をかぶる形で、警護も黒紋付ではあるが現在と同じ袴に一文字笠をかぶつた装いになっていることが確認できる。

昭和四〇（一九六五）年一〇月八日には、東京日本橋高島屋の屋上ステージで開催された「神奈川県民俗芸能のつどい」に出演している。当日のパンフレットには、「根府川の鹿島踊りは古風な正しい格調をもっている」と紹介されている。

永田衡吉は『神奈川県民俗芸能誌』において、鹿島踊の衣装について、「衣裳は全員、白丁の着る白張り浄衣が本格である。白木綿に糊をこわくつけ、狩衣に仕立てたもので下級神人の服とされている。太鼓鉦の役はその袖を肩のところにとぐりあげる。白足袋・白緒の草履。平礼烏帽子。」（永田、一九六八年、四三〇頁）と強いこだわりを見せていた。根府川の鹿島踊は、永田の助言を受け入れ、「（永田の考える）本格」を復活させたといえる。その結果として、神奈川県を代表する民俗芸能として、永田がこうした催しへの出演を推薦したと考えるもよいだろう。

5 その他

(1) 参考文献

内田一正 二〇〇〇『人生八十年の歩み・内田一正』内田昭光（私家版）

加藤恭兄編 一九五一『片浦村誌』神奈川県足柄下郡片浦村

永田衡吉 一九六八『神奈川県民俗芸能誌』錦正社

浜田和政 一九九五「小田原地方の神社祭礼について（調査報告）」近・

現代における祭りの形態とその変遷」『小田原市郷土文化館研究報告』

三一

浜田和政 一九九九「根府川の民俗芸能「鹿島踊り」と「福おどり」につい

て」『小田原市郷土文化館研究報告』三五

(2) 古写真等



写真1-4-7 白張を着始めたころ（昭和三八年関東ブロック民俗芸能大会パンフレットより）

(3) 特記事項(「福踊り」について)

寺山神社では鹿島踊のほか、小正月の子どもの踊りとして「福踊り」が伝承されている。

福踊りは、一月一四日に近い日曜日に行われる。寺山神社境内には、正月飾りや書初めを燃やすどんと焼きのやぐらが組まれ、道祖神の石像が飾られる。

子どもたちは腹にザルを結び付けて、その上に赤い着物か割烹着を着る。腰には注連縄を結び付ける。頭は手ぬぐいでほつかむりをして、おかめやひよっと

このお面を斜めにかける。踊りでは、両手に日の丸の描かれた扇子を持つ。子どもたちは神社に集まると、階段の前に横一列に並んで福踊りを踊る。楽器は用いず、歌も子どもたち自身が歌う。歌詞は以下の通り。

波乗り船の音のよき 宝船こぐ春の海

内には七福笑い顔 天から木槌が降って来て

大黒さんが打ち振れば 座敷の中は金の山

歌い囃せや大黒の 福は舞い込む恵比須顔

次にどんと焼きを取り巻いて円形になり、もう一度踊る。



写真1-4-8 どんと焼きのやぐら (館野撮影 2019年)



写真1-4-10 どんと焼きを囲んで踊る (館野撮影 2019年)



写真1-4-9 一列で踊る (館野撮影 2019年)

神社での踊りが終わると、数グループにわかれて地区内をまわる。「福の神が舞い込んだ、福の神が舞い込んだ」と触れ回り、踊りを所望する家や商店の前で踊る。踊り終わると、「笑う門には福来る、おめでとございます」と口上を述べ、小遣いをもらうと、「悪病神を追い払え」と唱えながら去ってゆく。

子どもたちの福踊りは、昭和三〇(一九五五)年を最後に途絶えていた。その後も、青年が新婚祝いで踊ることがあったが、小正月行事としては行われなくなっていた。

そのようななかで平成七(一九九五)年に復活の機運が高まり、片浦小学校の五年生、六年生の男子児童が、踊りを知っているお年寄りの指導を受けて、復活がなされた。

復活前は腹に箆を入れて、かすりの羽織を着て踊っていた



写真1-4-11 商店の前で踊る子どもたち（館野撮影 2019年）

たが、手に入りにくくなってしまったため、プラスチック製のボールと割烹着型のエプロンで代用した。その後、揃いの赤い着物を着るようになったが、人数が多いため数が足りず、割烹着を着ている子どももいる。

現在の福踊りは、根府川地区子供会によって担われている。踊りの指導は鹿島踊の経験者でもある地区のお年寄りが担当している。地区を触れ回る際には安全確保のために、子供会の保

護者がついてまわっている。

保護者の方にお話を伺うと、鹿島踊や福踊りなどの地域の伝統的な行事を経験できることも、学区外から片浦小学校に子どもを通わせる動機の一つになっているようだ。

地区としては少子高齢化、人口減少が進んでいるが、鹿島踊や福踊りに子どもがたくさん参加していることで、現在の根府川地区には活気があるように見える。祭礼や民俗芸能に地元住民以外の人びとが加わる事例はしばしば見られるが、ひとつの自治体のなかで関係人口を形成しているのは珍しいだろう。

（館野太朗）

## 第五節 米神こめかみの鹿島踊

### 1 伝承地について

#### (1) 伝承地の概略

米神は小田原市の南部に位置し、東は相模湾、西は箱根山系に面し、北は石橋、南は根府川に接している。人口は、小田原市統計月報によれば、令和三(二〇二二)年一月一日現在で二九二人(一一六世帯)である。平野部はほとんどなく、傾斜地に天高く柑橘類の畑のある地域で、集落は清水川の河口部、海のそばに密集している。集落は東を向いており、陽光にめぐまれて、ミカン畑が集落の後背斜面に広がっている。海沿いには小田原、湯河原、熱海、下田を結ぶ幹線である国道二三五号線が走り、集落と海とを隔てている。交通量は比較的多い。西湘バイパスは北側の隣の集落である石橋まで開通しており、自動車を保有している人にとっては、交通は比較的便利であり、小田原市中心部へは、混雑さえなければ一五分以内で到達できる。自動車以外では、箱根登山バスのバス停が国道にあり、利用できるが、便数はさほど多くはない。鉄道の場合は、根府川駅を利用して、徒歩二〇分程度である。以上のことから、交通面に関しては不便という事はなく、小田原市内への通勤通学も十分に可能な地域であり、生業は集落内の産業だけで完結してはいない。

米神の地名の初出は、『盛衰記』で頼朝が米嶺・石橋に陣を置いたとすることだろう。米神の地名の由来は、旧来「米嶺」と書いたことから、弘法大師が水を求めても与えられなかったことに怒り、この地の水源を止め米が炊けなくなり生米を嘔んでしのいだなどと伝えられる。

明治二二(一八八九)年の市町村制施行に伴い米神村が発足したが、大正

二(一九一三)年に石橋村・根府川村・江之浦村と合併して片浦村が発足、同時に米神村は廃止された。

#### (2) 暮らしの移り変わり

『新編相模国風土記稿』には土産として蜜柑、根府川石が挙げられ、特に根府川石は「紀伊殿の採石場あり」(蘆田、一九七二、一四七頁)と書かれ江戸城の石垣普請の採石場であったことがわかる。また「漁船八艘あり、農間に漁撈をなせり」(蘆田、一九七二、一四七頁)とあるため半農半漁を生業とする村落であったことがわかる。米神沖の定置網は大正時代前後に大漁であり相模の鰯として名を馳せるほどであった。神社に奉納されている絵馬

からもその様子は伺える(写真1-5-1)。

『片浦村誌』によれば、片浦村では明治初年ころより栽培が本格的に開始され、明治三〇(一八九七)年ころには紀州蜜柑と温州蜜柑が栽培されていたようである。時代が進むにつれ一層栽培は盛んになったが、自身も蜜柑農家である昭和二二(一九四六)年生まれの男性によれば、昭和三〇年代ころが最盛期だったので



写真1-5-1 米神沖定置網漁の絵馬 (保坂撮影 2019年)

ないかという。

集落の中心部をワインディング状に南北に貫いている道（正壽院下の道路）は、かつて（東海道本線が御殿場線であった時代）小田原から熱海まで走っていた鉄道の線路跡（豆相人車鉄道↓熱海鉄道↓大日本軌道）と言われる。国鉄が小田原から真鶴の間を開通させた大正一一（一九二二）年、営業を休止した。線路跡と言われるだけに、この道は平野のほぼない米神にあっても、高低差が少ない。現在は集落のやや上方に東海道本線が通り、人家のある最上部に東海道新幹線が通っているが、米神には駅はない。集落の奥の山中には、石材所があり、この地域がかつて石材の産地であった、あるいは石材を運搬する船運で栄えていたことをかすかにしのばせる。

### （3）神社の由来と伝承地の信仰

正八幡神社は『相模湾漁撈習俗調査報告書』によれば、かつて八幡神社と呼ばれ、その由緒は「江戸時代の末ごろ、浜辺に大波が一日中寄せていた日、米神の七軒百姓の一人、鈴木七兵衛さんが夜も大分ふけてから床に入り、うとうとしていると「七兵衛、起きろ。」と枕元で声がした。目を覚ましてみても誰もいない。不思議に思つて浜に出てみると、浜辺に後光のさしている物が落ちていた。驚いて拾い上げてみると若宮八幡であった。これを祀ったのが八幡神社の起りだといわれている」（神奈川県教育庁指導部文化財保護課、一九七一、二二三頁）。祭神は『片浦村誌』によれば天津兒屋根命である。旧は本地物彌陀が安置してあったが明治初年になって本像を正壽院に移すことにした（加藤、一九五一、七一頁）。昭和二一年生まれの男性によれば、正壽院から「正」の一字をもらい「正八幡神社」と呼ぶようになった。正八幡神社は海沿いにあり、本殿は西方、海に向かっていて、海岸通りより

も一段高い位置にあり、階段を上って鳥居をくぐる。海側からは松が二本並んでいるのが目立つ。前述の通り、拜殿内には海に関する絵馬が奉納されており、海沿いの立地とともに、海と大いに関係のある神社であると言える。

正八幡神社とともに鹿島踊が奉納される正壽院は、『片浦村誌』によれば「古義真言宗で国府津寶金剛寺の末派に属している。舊は本尊不動及び舊觀音堂本尊の十二面觀音の石像彌平兵衛宗清作一尺七寸や豊三家安の甲冑立像が置いてあった。元和、寛永中に開山長徹と云う僧が起立したと云われている」（加藤、一九五一、七二頁）。豊三家安は石橋山の合戦で源頼朝側の武将・佐奈田与一の家臣として参陣した人物で米神に塚がある。

鹿島踊が奉納されていた日遼寺は『片浦村誌』によれば、「日蓮宗で小田原玉傳寺の末派と傳えられている。開山日遼が寛永十一年に開創したと云われている。昔鈴木七兵衛が庄屋をしていた時に日遼という人が此の家の世話になった関係で七兵衛が庵を作つて置いたのだと云われている」（加藤、一九五一、七二頁）。現在寺院はなく鈴木家の裏に堂があり、日照寺もしくはオソッサンと呼ばれている。堂内は二部屋あり西側は祖師像を祀り、東側は若宮八幡と稲荷の祠が祀られている。

## 2 祭礼について

### （1）祭礼名

正八幡神社例大祭

### （2）期日

五月一五日（現在は五月一五日に近い日曜日）

昭和二一年生まれの男性によると、小学生のころは、五月一五日の祭礼日

に小学校が半ドンになり祭りが優先された。その後お茶の栽培が増え、茶摘みの時期であるため、日が変わっていった。

### (3) 祭礼の概要

祭日は五月一五日であるが、生活変化や少子化に伴い、五月一五日に近い日曜日に行われるようになった。土曜日に山車曳き、鹿島踊、日曜日に正八幡神社で祈願祭、神輿担ぎが行われる。なお、令和二(二〇二〇)、三年は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、神事のみが行われた。

### (4) 祭礼の構成と進行

以下、令和元(二〇一九)年の様子をもとに現在の祭礼の流れを述べる。

#### 鹿島踊の稽古 祭礼前の三日

間、一四日、一六日、一七日の午後七時に神社の西側にある公園(以下、遊園地)で一時間程度鹿島踊の練習を行う。一四日は雨天のため公民館一階で練習した。子どもが五人から一〇人程集まり祭典委員が基本の動作から、全体の流れを教える。祭典委員長が手本を見せ、動きを説明する。アゲハが歌いそれに合わせて踊る。参加している子どもとその親、祭典委員など



写真1-5-2 祭礼前の稽古(保坂撮影 2019年)

二〇人程が参加している。

五月一七日(金)午後七時〇〇分 公民館二階で鹿島踊の三役が持つ太鼓、



写真1-5-3 楽器、採物の調整(保坂撮影 2019年)

鉦、カガミ、マラ棒、コイビ

シヤクの手入れを行う。各道具

の表面を飾る色紙を貼り直

す。吹き流しを付ける。コイ

ビシヤクに色紙の紙片を入れる

る。三役の採物と鳴り物の準備

は役を担う者たち自身が行

っている。役員たちは祭礼

で飾る燈籠などを製作する。

燈籠には「奉納」、「正八幡神

社祭礼」、「午頭<sup>ママ</sup>天皇」と書か

れている。

一八日(土)午前七時三〇分

八幡神社横の駐車場

では祭礼幟の準備が

行われる。幟竿の先端

に紙垂を付け注連縄

に紙垂を付け飾り付

ける。榊はかつてシ

ラカシで米神にあつ

た木を使った。幟竿

は石材店からクレ-



写真1-5-4 幣束を整える正壽院僧侶(保坂撮影 2019年)

ン車を借りて立てる。幟を立てる場所は、神社の脇の駐車場だが、かつてここはブリを揚げるところであった。幟を立てた後、集落内に注連縄を張る役、神社境内に灯籠を付ける役、鹿島踊の採物・幣束をつくる役、公民館の宴会場準備役、御輿・山車準備役、神社の掃除役に分かれる。

注連縄に付ける紙垂と幣束の紙垂は正壽院の僧侶が事前に製作しており、この日の幣束の準備は採ってきたメダケに切り込みを入れ、紙垂を付ける作業である。完成した幣束、三役の採物、太鼓、鉦は正壽院の僧侶によりお祓いをされる。昼ごろまでに準備は終わらせる。

一八日(土) 午後二時〇〇分 山車曳きが始まる。正八幡神社から山車に付いたロープを持ち集落内を曳き回し、午後四時に神社裏の遊園地に戻る。山車は木製で上部が屋根付きの舞台になっている。屋根には花飾りが付けられ、舞台側面には「古」(こめかみの「こ」と思われる)と書かれた提灯が無数に飾られている。かつては屋台囃子の保存会があり山車の中で小田原囃子を演奏したが、現在では録音した音を流している。この山車は正八幡神社の隣に住んでいた大工が製作し奉納した。

一八日(土) 午後五時〇〇分 公民館で祝宴を始める。会場は公民館二階の広間で、上座の机の上に獅子頭が祀られている。この獅子頭は青年団が存在していた時代に祭礼後のハチハラエに使用したものである。

一八日(土) 午後六時四五分 正壽院に祓われた鹿島踊の道具を取りに行く。

一八日(土) 午後七時三〇分 神社裏の遊園地に鹿島踊参加者が集まり列をつくる。鉦の音を奏でながら正壽院に向かう。正壽院境内で踊る。正壽院で踊り終わると鉦の音とともに列を作り正八幡神社へと移動する。神社では、拝殿前で踊る。踊りが終わると、神社から遊園地へ戻り、午後八時に終了し解散した。

一九日(日) 午前一〇時 拝殿内にて神事・祈願祭が始まる。正八幡神社は小田原市早川紀伊神社の末社であるため、紀伊神社の神職による祝詞の後、宮総代や自治会長などが玉串を捧げる。神事の後には参列者による直会が行われる。

一九日(日) 午前一一時 子ども神輿、幼児御輿を担ぎ出し、集落内を廻り、最後に漁港で海に子ども御輿を入れる。

一九日(日) 午後三時 宮入りし、子ども神輿を大神輿の横に安置する。

大神輿は祭礼中動かさずに神社に安置してある。なお『地震と戦争の記録 ふるさと米神』によると、大神輿は、鹿島踊が伊豆から伝えられた後に、漁業権のいざこざに巻き込まれた米神集落が思わず手に入れた大金を使うために東京浅草の間屋にあったものを買い東海道線で国府津まで運び、国府津から地元青年によって、手で運ばれたとしている。子ども神輿は大神輿により賑わった祭礼を子どもにも体験させたいと考え、小田原山王の宮大工に注文したものであり、どちらも明治期の神輿と伝わっている。(鈴木、一九八二、一二五―一二六頁)

#### (5) 祭礼組織

祭礼の担い手であった青年の減少などに伴い、祭典実行委員制度が設けられたが、平成二九年までは大頭(オオガシラ)が祭典の長の立場だった。大頭は中老の最後の年である教えで五〇歳の者となる。祭典実行委員は祭典委員長、祭典実行委員長、祭典実行副委員長、会計が各一人、祭典実行委員会幹事として各組の組長が担う。祭礼の準備として、注連縄、灯籠、幣束、会場、祭礼当日の神輿・山車の渡御、神社掃除、翌日の片付けを自治会の会員で複数名割り当てられる。その他子ども会役員が準備に参加する。

### 3 鹿島踊について

(1) 由来と意味

昭和六(一九三一)年生まれの前壽院名誉住職によれば、米神の鹿島踊は明治の初年までは行われていなかったが、前壽院三世福守智榮和尚が明治一〇年に晋山した後、米神に神社祭祀に行事がなかったため、村人と相談し導入したことが始まりだという。福守智榮和尚は江戸時代末に現在の伊豆の国市中伊豆の名字帯刀を許された家の出身である。そのため西伊豆に伝わっていた鹿島踊を現地から三人を呼び二、三ヶ月間前壽院を宿として当地の男性陣に教えたという。この話を聞いた石橋、根府川の人々も同じ西伊豆の人から踊りを教わったが、根府川では数年で絶え、再び別地区から踊りを習ったと前壽院に伝えられている。ただし根府川の伝承では、吉浜から江戸中期に伝えられたといわれており、西伊豆については伝えられていない。また、現在、西伊豆には鹿島踊を伝承している地域はないため、伝承元の具体的な場所は不明である。

また、昭和二一年生まれの男性によると、米神の鹿島踊は娯楽としての側面が強いという。明治時代に鹿島踊を始めた理由も前壽院の住職が村に娯楽がないから青年に娯楽を提供するためであったそうだ。そのため古い形を残すよりも、青年が好きなように変えて崩されているのではないかとのことだった。

なお『地震と戦争の記録 ふるさと米神』によると福守智榮和尚の出身は伊豆江之浦(現在の沼津市江浦か)の岩崎家である。また祭礼の宵宮に酒びたり、博打に喧嘩が横行していたため、故郷江之浦で伝わる鹿島踊を若い衆に勧めたことが始まりであり、踊り上手を三名呼び寺に三ヶ月寝泊まりさせたことから、青年宿が寺に置かれたことがきっかけとなったと伝えられている。

る(鈴木、一九八二、一二五―一二六頁)。

近世以前の文献上では米神の鹿島踊に関する記録がなく、これらの由来を元にする前壽院三世福守智榮和尚が晋山した明治一〇年以降に始まったと考えられる。伝承元は西伊豆か伊豆江之浦か、記録がないため明確ではないが、いずれの由来も前壽院が関わっている。米神の鹿島踊は現在正八幡神社が伝承地となっているが、前壽院の関わりは当地で鹿島踊が始まった当初から深く、現在においても鹿島踊の幣束の紙垂は住職が製作している。

(2) 踊り手とその組織

米神は、神奈川県内で現存している鹿島踊のなかで唯一保存会を組織しておらず、伝承母体は米神自治会である。そのため、子どもたちに稽古をつけるのも米神自治会の祭典委員長、および祭典委員である。また、祭礼前に楽器や採物の調整も自治会の人々が行う。

踊り手は、三役(カガミ、マラ棒、コイビシヤク)、鳴り物(太鼓二人、鉦二人)、子ども会、そのほか基本的に役のないモドリで構成されている。モドリは、かつては青年を抜けた踊り手だったが、現在は大人の踊り手である。数の制限はなく大人数が踊る。モドリは踊りながら合の手も入れる。かつては下の句をモドリが歌っていたが、現在は歌い手が中心となって歌うようになった。

歌い手は、アゲハと呼ぶ。上の句を歌うアゲハは昭和四〇年代には四人おり、現在は二人であるが、特に定数はない。正面が立ち位置である。アゲハは基本的には五〇代以上の大老から選出される。

他地域で見られる警固役はいない。『小田原文化誌』によると警備の記述はなく(小田原市文化団体連絡協議会 一九七六 二〇五頁)、「相模湾西海

岸の鹿島踊―その諸相と宗教的機能―においても警備の記述はない(吉川、一九八八、四五頁)。

### (3) 衣装

踊り手は基本的に全員同じ浴衣を着用する。浴衣は小田原の間中病院の前にある片野屋で設えた。三役と鳴り物は浴衣の上半身をはだけ、揃いの鯨シャツをのぞかせている。黄色と赤色の襷を掛け、襷は背中に長く垂れている。手甲は青色を巻いている。鉢巻は桃色、青色、黄色、赤色の者がいる。足は白い地下足袋を履く。浴衣に変わったのは戦後のことで、戦前は折烏帽子、白張浄衣、白足袋、白鼻緒の草履であった。太鼓と鉦の踊り手は、手甲、脚絆に赤い色の襷であった。

子どもは揃いの浴衣、好みの浴衣、洋服の上に祭半纏を着る者がおり統一されていない。半纏の背には「祭」と染められている。

アゲハ、祭典委員は揃いの浴衣の上に黒の羽織を着用している。

### (4) 採物、楽器

三役の採物は、マラ棒(日型)、カガミ(月型)、コイビシヤク(黄金柄杓)と呼ばれる。( )内は正壽院の名誉住職が示した呼び名を記した。

マラ棒は白い和紙を上部につけ、柄は金紙と紙テープを巻いている。柄の上部にはプラスチックボールに金紙を巻きつけている。カガミは上部に、金・水・黄・赤・オレンジ・銀色の色紙をつけて切り込みを入れている。柄は全体に銀紙が巻かれており、女性の写真が貼られている。カガミは女性を表しているためこのような写真を貼っており、マラ棒は男性を表している。

楽器は、短胴杵付き締め太鼓で、胴はケヤキ、木綿を三本左撚りして締め

ている。太鼓は重量があるため、四ヶ所で鹿島踊を踊っていた当時は「ヒトオドリ四ヶ所の太鼓ができれば一人前」と言われていた。撥は金紙をつけ、赤・黄・オレンジの紙テープを垂らす。鉦は全体を色紙で包み、縁に紙テープをつける。撞木は鉦と同様全体を紙テープで巻く。

モドリとアゲハの採物は幣束と二の丸の扇子である。モドリの幣束は、白の紙垂を先端に付けた二節の女竹である。節には袴を残しているが、袴の形は整えている。アゲハの幣束は五色の紙垂を先端に付けた三節の女竹である。モドリの幣束と同様、節には袴を残しているが、袴の形は整えている。

踊り手、アゲハともに扇子は左手で持つ。行列を先導する四人の祭典委員は「祭典委員会」と書かれた弓張提灯を持つ。

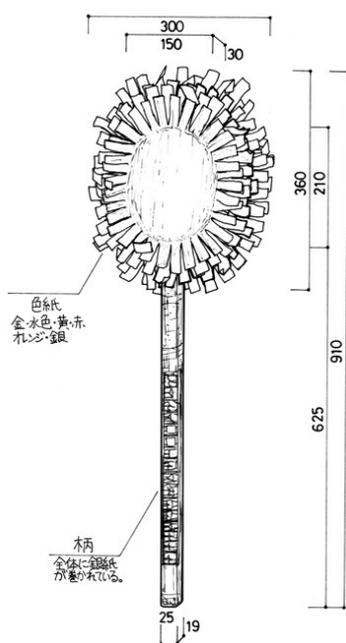


図1-5-2 カガミ

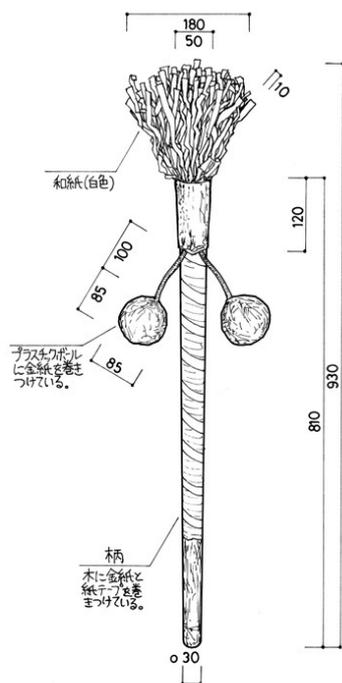


図1-5-1 マラ棒

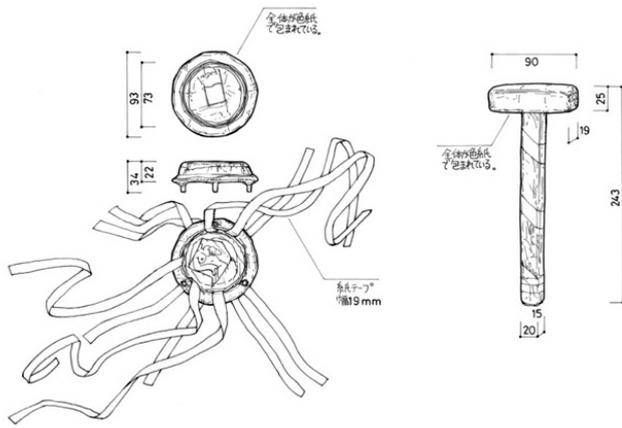


図1-5-4 鉦と撞木

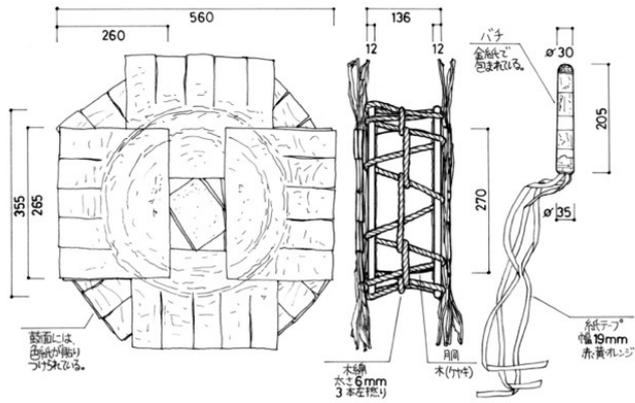


図1-5-5 太鼓と撥

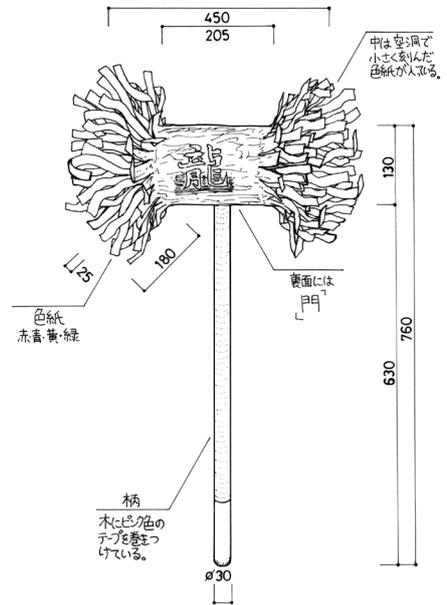


図1-5-3 コイビシャク

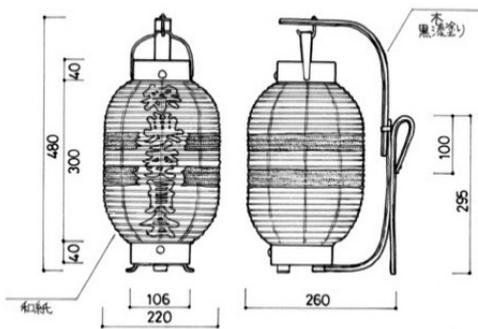
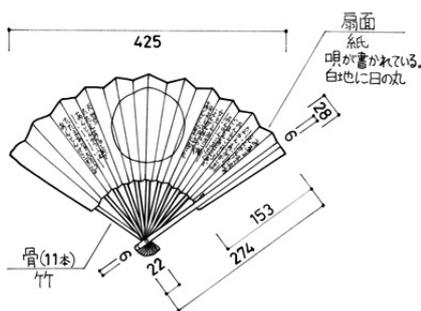
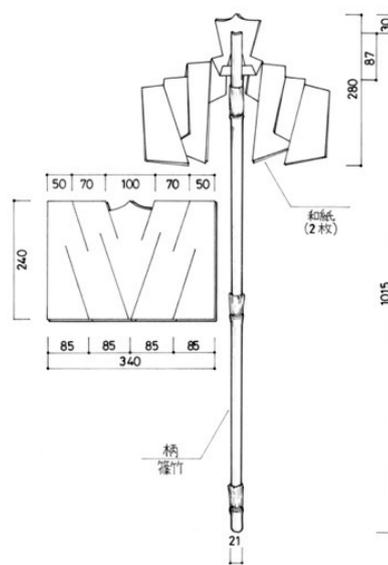
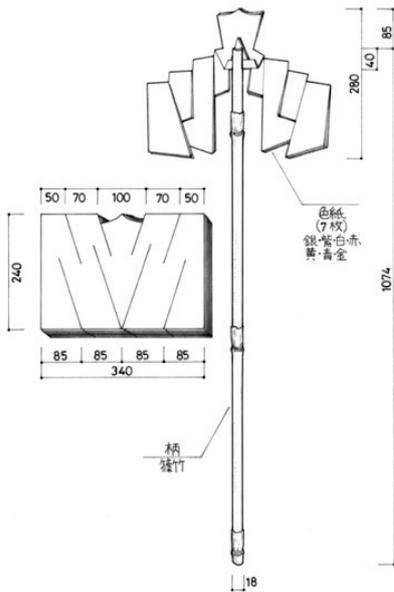


図1-5-6 (上) 幣束 (下左) 扇 (下右) 提灯

(5) 歌詞

上の句をアゲハ、下の句をモドリが歌う。実際に歌う際には、地語を覚えて歌っているため、ここでは地語と歌詞を記す。地語はアゲハ用に書かれた手書きのプリントより転載した。歌詞は地語から推察し記す。便宜上、最初に歌詞を「」で記す。上の句をカタカナ、下の句をひらがなで表記した。合いの手は（）内に記した。なお、はじめの口上（「ちはやふる」）には地語はないため、歌詞をそのまま記した。

ごまえ あんとんおで  
おんのん ごまたくく

四 「その護摩を 何んと焚き候 御所の十三御姫 がめにつく」

イヤー ソノゴマハナ(ソコクソコエン)  
エトサオギニソ イヨーエ  
女王え おさこ姫  
えんがん めにつく

ちはやふる 神々のいさみなれば みろく踊りのめでたや  
一 「まことやら かしまのうらに みろくお舟がついた」

五 「目につかねば つれてござれ 江戸 品川の果てまでも」

オエヤ マコトヤラ アラナエ カウオーシヨ  
マノオウラニ イヨーエ  
みろえ おくお舟  
えんがん つえた

イヤー 目ニツカバナエ ツオーレ  
ゴウオザレ イヨーエ  
おおえ 江戸 品川  
あんとん 果てまでも

二 「艫舳には 伊勢と春日の(ソコソコソコエン) 中は鹿島の 御社」

イヤー トモエニハナ(ソコクソコエン)  
セトカウ オースーガ イヨーエ  
なかえ ありやかしま  
おんえん ごやしる

六 「天竺では近いな女郎 たたらふむ やつふむ」

イヤー 天竺ナエ チウオシカ  
カウオージョウ イヨーエ  
たたえ ありやふむが  
あんとん やつふむ

三 「鹿島では 稚児が踊りに 護摩堂では 護摩を焚く」

イヤーカシマデハナエ チウオウギヨ  
オガオウオドリソ イヨーエ

七 「そのたたら なんと踏み候 たたら たたらの稽古する」

イヤー ソノタタラナ(ソコクソコエン)  
エートユウオミニソウ イヨーエ

たたえ ありやたら  
あんとん けいこする

(6) 全体の流れ・道程 (主な踊りの場)

鹿島踊は宵宮のみで踊られ、平成三〇(二〇一八)年、令和元(二〇一九)年の踊りの場は正壽院、神社境内の二ヶ所であった。

集合から移動 まず遊園地に集合し、行列をつくる。行列は二列で祭典委員四人が提灯を持ち、アゲハは提灯を持たずに先導する。次に鉦二人、太鼓二人、三役、踊り手の子ども、モドリの順である。移動中は「エンヤー」の掛け声の後、太鼓、鉦が「チャチャチャ チャチャチャ チャンチャチャ」の者と同じ節で扇子を叩く。これを繰り返す。

正壽院 一つめの踊り場である正壽院の階段下に着くと、祭典委員とアゲハは先に境内に入り本堂前に並ぶ。三役、鳴り物、子ども会、モドリが全員入り所定の位置につき踊りだす。踊りが終わると、祭典委員から境内を後にし、前述の行列の順



写真1-5-5 正壽院での鹿島踊 (保坂撮影 2019年)

番で境内を出て行列になり、神社へと移動する。

正八幡神社 神社では鳥居から入り、祭典委員とアゲハが拝殿前に並ぶ。平成三〇年は境内に神輿を置いていないが、令和元年は境内中央に大神輿、子ども神輿を置き、その周りで踊った。踊りの内容は正壽院と同様であり、終わると再び行列を作り遊園地に向かって終了となる。

正壽院、正八幡神社ともに一番から七番まですべて踊る。これをヒトオドリと呼ぶ。

(7) 踊りの所作と隊形変化

入場 踊り場である正壽院、もしくは正八幡神社の境内に入ると、移動中の囃しのリズムが早くなり、踊り手は境内で時計回りに移動し、円形になりながら回り続ける。全員が境内に入り、二回程回ると「ヤー」のかけ声で「チャンチャン」と鉦を鳴らし、また「ヤー」のかけ声で鉦を「チャン」と鳴らす。そして、踊り手が全員腰を落として座る。

口上 踊り手の準備が整ったことを見計らい、鉦の一人が「ちはやふる」と歌い出す。続けて全員で「かみがみの」、鉦の一人が「いさみなれば」と歌い、また全員で「みろくおどりめでたや」と続ける。

ワオドリ 鳴り物を中心に、そのまわりを三役、さらにその周りを子ども会とモドリが囲む隊形をワオドリもしくはマルオドリと呼ぶ。口上の「みろくおどりめでたや」の直後に全員で「オヤーソレ」と掛け声をかけながら立ち上がる。踊りが始まると、同じ所作を繰り返す。以下、ワオドリのそれぞれの所作を記す。

○鳴り物

立ち上がった太鼓と鉦は頭の上で撥、撞木をまわしたあと、二回それぞれ

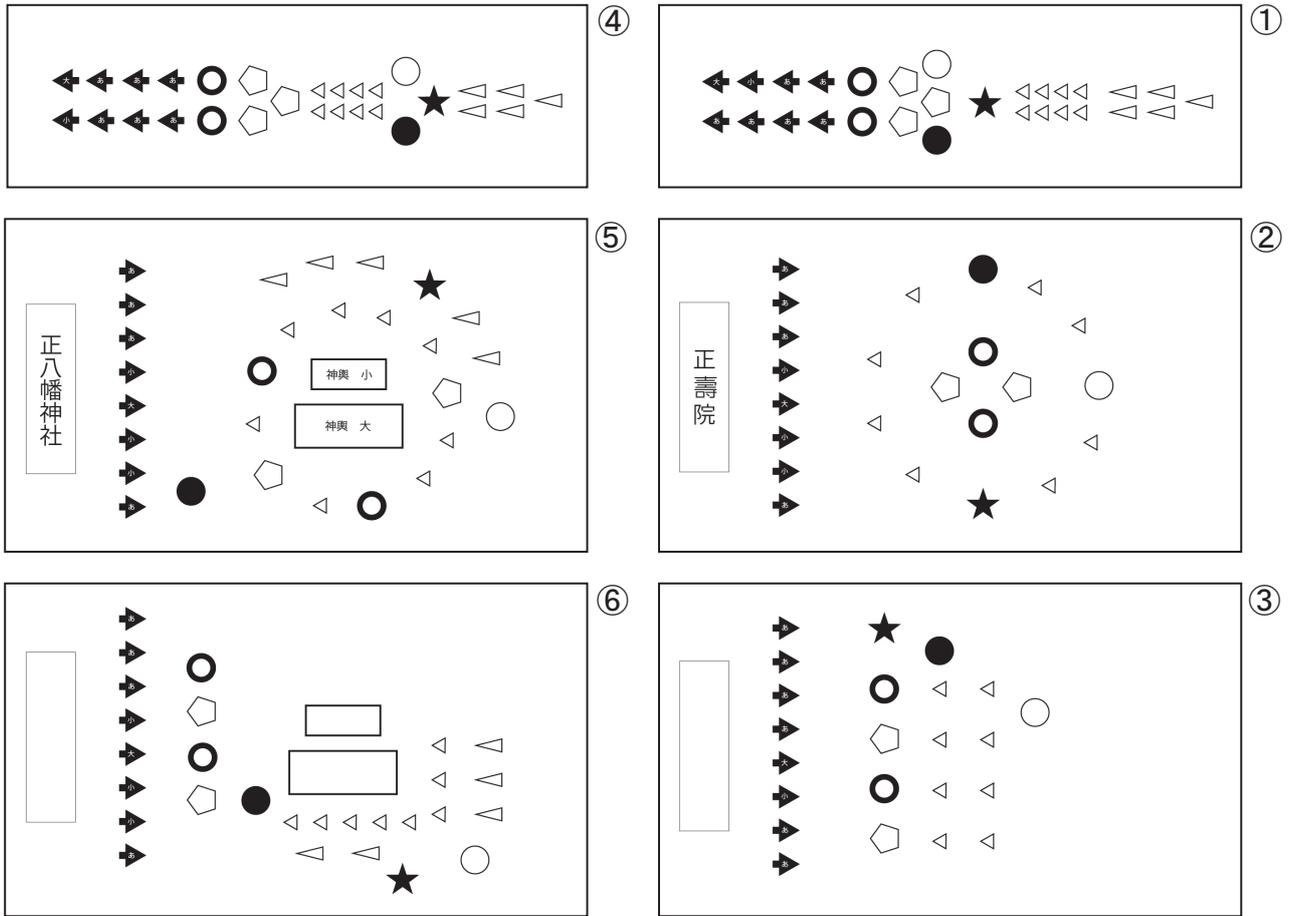


図1-5-7 米神鹿島踊隊形図

の楽器を叩く。「ドッコイ」の掛け声で時計回りに数歩進みながら、太鼓・鉦を頭上に掲げて一度叩き、しゃがむ。

○三役

「オヤソレ」の「ソレ」で右腕をのばし、扇子を持つ左手を横に広げる。一度目の鳴り物の音に合わせて右腕を曲げ胸の前に扇子を持っていき、二度目の鳴り物の音に合わせて、再び右腕をのばす。「ドッコイ」の掛け声で鳴り物と同様時計回りに数歩進む。この際、コイビシヤクを振りヨネ（色紙）を撒く。

○子ども会・モドリ

「オヤソレ」の「ソレ」で右腕を「ドッコイ」の掛け声で左足を少し横に出す。鳴り物の音を聞いてから両足を曲げ、同時に扇子を胸の前で下から上へと移動させた上で、右腕を伸ばす。扇子を持つ左手を横に広げる。一度目の鳴り物の音に合わせて右腕を曲げ胸の前に扇子を持っていき、二度目の鳴り物の音に合わせて、再び右腕をのばす。

ワオドリのソコソコ

二番の「トモエニハナ」四番の「ソノゴマハナ」の直後に歌を止め、掛け声のみの踊りがある。これをソコソコと呼ぶ。ソコソコのそれぞれの所作は以下の通りである。

○鳴り物

「ソコソコ」で時計回りに左、右と足を出し二回楽器を叩く。「ソコエン」で三回目を叩きながら逆向きとなり両手を上げる。「ソコソコ」では、「ソコエン」では逆方向を向

く。一回目の「ドッコイソコエ」で左を向き楽器を叩く。二回目の「ドッコイソコエ」で右を向き楽器を叩く。「ドッコイソコエソコエ」で二回楽器を叩きながら逆時計回りに数歩進み、「オヤー」で楽器を一回叩いて内側を向く。いずれも頭上で楽器を叩く。

### ○三役

鳴り物の音に合わせ、鳴り物と同様の所作をする。

### ○子ども会・モドリ

「ソコソコ」でその場で右、左と時計回りに足を踏み出す。右足を踏む際に、左手で持つヘイソクの持ち手部分を上にあげ、左足を踏む際に、持ち手部分を下げる。「ソコエン」で逆向きとなり、持ち手部分を上げる。一回目の「ドッコイソコエ」で左を向きながら、持ち手部分を上げ、二回目の「ドッコイソコエ」で右を向きながら持ち手部分を上げる。「ドッコイソコエソコエ」で正面を向き、扇子を左手前に持っていく。「オヤー」で両足を曲げ扇子を下から上へ運び、最後は立ち上がり両手を広げる。

カタオドリ 列に並ぶ隊形を、カタオドリという。六番冒頭の「テンジク」に入る際で、「テンジクー！」と叫んで隊形変化する。隊形変化後のそれぞれの位置は図のとおりである。正壽寺の場合、本堂を左側にした向きに並ぶ。以下、カタオドリの所作を記す。

### ○鳴り物

「オヤーソレ」で体を左を向いて左足を一步前に出す。頭上で撥・撞木を回しながら二回楽器を打つ。楽器は腰のあたりで支えている。「ドッコイ」で正面を向き、一回叩いてしゃがむ。

### ○三役・子ども会・モドリ

「オヤーソレ」で体を左に向けながら、右腕を下向きに伸ばす。一度目の

鳴り物の音に合わせて右腕を曲げ胸の前に扇子を持っていき、二度目の鳴り物の音に合わせて、再び右腕をのばす。「ドッコイ」で正面を向き、鳴り物の音を聞いてから両足を曲げ、同時に扇子を胸の前で下から上へと移動させ、最後は両手を上げる。

カタオドリのソコソコ カタオドリでは七番の「ソノタタラナ」のあとにソコソコが入る。ワオドリの時と同様、掛け声のみとなる。

### ○鳴り物

「ソコソコソコエ」の「ソコソコ」は左を向いて二回たたき、「ソコエ」で左を向き楽器を頭上に上げて一回叩く。一回目の「ドッコイソコエ」で左を向き楽器を叩く。二回目の「ドッコイソコエ」で右を向き楽器を叩く。「ドッコイソコエソコエ」で正面を向き、二回楽器を叩く。

### ○三役

鳴り物の音に合わせ、鳴り物と同様の所作をする。

### ○子ども会・モドリ

「ソコソコ」では左側を向き、左手で持つヘイソクの持ち手部分を上、下に動かす。左足を踏む際に、持ち手部分を下げる。「ソコエン」で右向きとなり、持ち手部分を上げる。一回目の「ドッコイソコエ」で左を向きながら、持ち手部分を上げ、二回目の「ドッコイソコエ」で右を向きながら持ち手部分を上げる。「ドッコイソコエソコエ」で正面を向き、扇子を左手前に持っていく。「オヤー」で両足を曲げ扇子を下から上へ運び、最後は立ち上がり両手を広げる。

退場 七番の最後「あんどん けいこする」の歌が終わると間をあげず「エンヤ」と掛け声が入り、太鼓、鉦が「チャチャチャ チャチャチャ チャン

チャチャチャン」と鳴らす移動中の囃しに変わる。アゲハから順に退場する。

#### 4 伝承内容の変遷

(1) 伝承の基盤、背景、生業

伝承組織の変化 米神での鹿島踊は、戦前は若い衆、戦後は青年団を中心に行われていた。以下、戦前は昭和六(一九三二)年生まれ、戦後は青年団を中心に行われていた。以下、戦前は昭和六(一九三二)年生まれ、戦後は青年団を中心に行われていた。以下、戦前は昭和六(一九三二)年生まれ、戦後は青年団を中心に行われていた。

戦前は青年会があったが、戦時中から青年団と呼ぶようになったという。

青年会(青年団)は男子全員が入っており、宿で寝泊まりしていた。『地震と戦争の記録 ふるさと米神』によると大正二二(一九二三)年における青年宿は正壽院の庫裏にあった(米神自治会、一九八二、二二二二三頁)

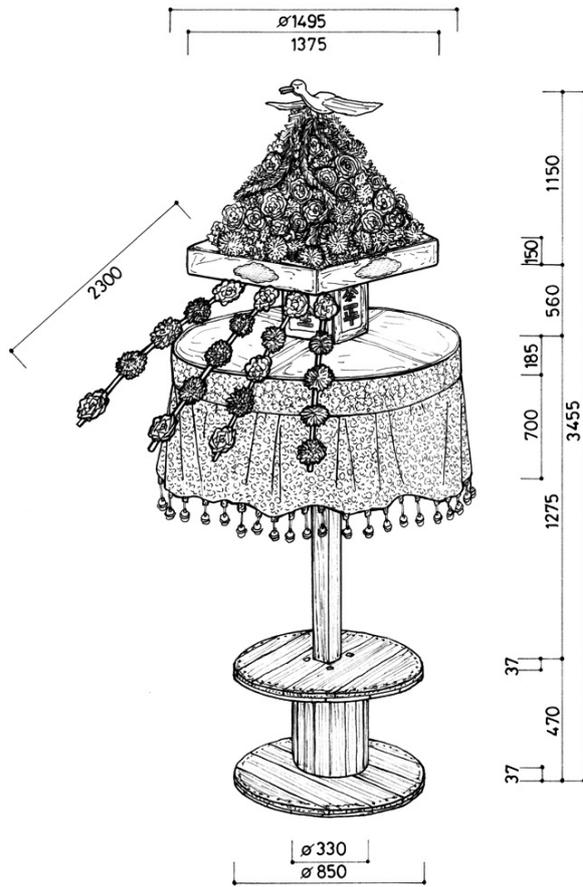


図1-5-8 マンド(万灯)

戦前は、尋常小学校を卒業した一三歳から一七歳くらいまでの青年会に入る前の者たちをコワカイシ(小若い衆)と呼び、彼らも鹿島踊に参加した。青年会をワカイシ(若い衆)、三〇歳くらいから五〇歳を中老、五〇歳より上になると大老と呼ばれた。大老の内、歌に自信がある「のど自慢」から、二、三人がアゲハを担ったが、鹿島踊の主役はワカイシで、中老と大老は基本的に神輿を担当した。このころ神輿は中の山の神社の横に神輿小屋があり、そこに保管していた。祭礼前に神輿を神社まで運ぶのも中老であった。運んだ神輿を磨くのは子どもが行っており、神輿磨きは現在でも子どもの役割である。

かつて大老という呼び方の組織はなかったとの話があるため、昭和になつてから作られた組織と思われる。

青年団は基本的に長男が加入した。青年団の拠点となる青年会場は、正壽院横の元東米神農協の場所にあった。高校を卒業した一八歳ころに加入し、数え二七歳で退団した。入団時はカネオヤ(保証人)を立てた。カネオヤは仲人親のような感覚で、実の両親が信頼できる人を選んだ。社会的な勉強も教えてくれる存在であり、中にはカネオヤを掛け持ちしている人もいた。米神は漁が盛んだったため家が農家であっても、カネオヤが漁師であると舟に乗り、手漕ぎの舟をこげるように練習した。

昭和四〇年代には青年団をコワカイシともワカイシとも呼んだ。加入年代は戦前と同様である。

入団した者は皆鹿島踊を習い、一通り踊れると一人前と言われた。退団した後は中老となる。当時の中老の年齢層としては二八歳から五〇歳までで、祭礼では神輿を担ぐ役であった。中老より年長の人々は大老と呼ばれる。中老の最後の年の数えで五〇歳の者は大頭といい、祭りの音頭をとった。この

大頭の役は青年団、中老会が解散したあとも、平成二九（二〇一七）年まで続いた。戦前は大頭の補佐をする小頭（コガシラ）と呼ぶ役が二人いた。採物、踊りの変化 大頭と小頭、アゲハは五色の幣束を持った。

日の丸の扇子は踊り手全員が持つことは今と変わらない。また役のない踊り手は白色の幣束を持つことも変わらない。幣束に使う竹は、袴がきれいな二年か三年の女竹で三尺三節の物を使った。鹿島踊の踊り手に人数の制限がないため、多い時は一〇〇人に及ぶこともあり、一〇〇人分の幣束を寺で作るのは大変だったという。

二〇年ほど前まで、子どもも大人と同じ三節の竹を使って踊ったが、その後木の棒を使うようになり、平成二九年には木の棒は持ちにくいことから、竹で二節に改めた。

ワオドリ（マルオドリ）、カタオドリに隊形変化する点は変わらないが、戦前は神社もしくは寺から見て左手前にアゲハが三名程度、右に大頭、小頭二人が並んでいた。輪踊りの中央は鉦、太鼓、鉦、太鼓の四人で、外側に黄金柄杓、日型、月型、さらにその外に踊り手が円になり、時計回りに踊った。後述するマンド（万灯）のあったころは、マンドと神輿も円の中に入った。方踊りは、アゲハ、大頭、小頭の位置は変わらず、前列左から鉦、太鼓、太鼓、鉦、二列目は日型、黄金柄杓、月型、三列目以降は踊り手が一列四人並び、マンドと神輿の両側に列を作った。

コイビシヤクには中に「ヨネ」と呼ぶ色紙を細かく切ったものを入れていたが、かつては本物の米であったという。

鹿島踊を踊る場所は、現在の踊りの場である正壽院、正八幡神社以外に神社横の幟の下と日照寺があった。幟の下は平成二九年まで踊っている。当時は、幟の下では隊形変化をする「テンジク」の前まで踊り、日照寺のお堂の

前でカタオドリへと隊形変化した後の「テンジク」から歌い、続きを踊った。また自治会長宅など一部の家の庭でも踊っていた。

祭礼の変化 かつて、祭りは三種類あった。最も規模の大きいものが大祭り（オオマツリ）である。大祭りは大漁だった場合などで、大祭りの開催を決定するのは中老の役目であった。大祭りを最後に行ったのは昭和四九（一九七四）年ごろのことである。大祭りでは、大神輿とマンドが出る。大神輿は祭礼当日に神社から町内を練ってまわり海に神輿を入れる。マンドは大小二つあり、戦前はマンドを扱うのはワカイシであった。戦時中ワカイシが徴兵にとられた際にはコワカイシが担うこともあったという。戦時中は人手不足から鹿島踊の存続も危ぶまれたが、大老が正壽院に集まり相談し自分たちが鹿島踊を続けていく決意を語ったこともあった。

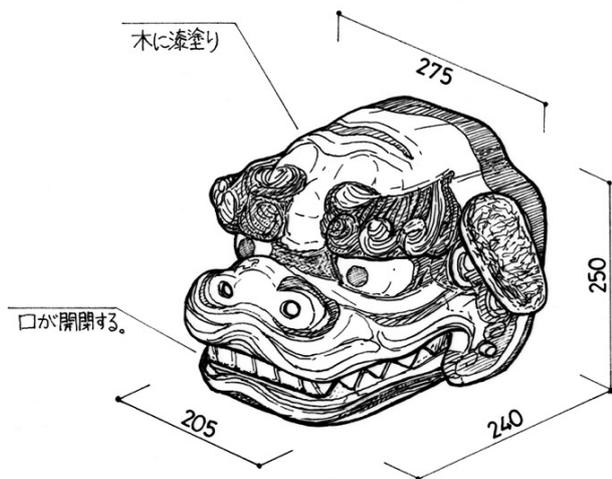


図1-5-9 獅子頭（シシガシラ）

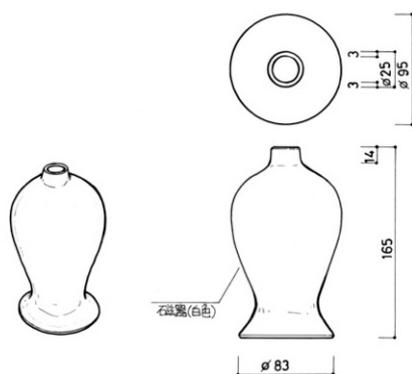


図1-5-10 神酒徳利

次に規模の大きい祭りを中祭り（チュウマツリ）と呼んだ。中祭りでは大神輿が出る。大祭り、中祭りでは、鹿島の踊り手



写真1-5-6 ハチハラエの仮装 (廣石計典さん提供 1970年ころ)

が神輿とマンドと共に地区を練り歩いた。鹿島踊を踊る場所には太鼓、鉦、太鼓、鉦、三役、子ども会、モドリ、アゲハの順番であった。その後、太鼓と鉦が真ん中、その外に三役、そのさらに外に子ども会やモドリ、最後にマンドが円の中心に入り、マンドの後に神輿がついてきた。

最も規模が小さい祭りを小祭り(コマツリ)と呼んだ。小祭りでは子どもが担ぐ小神輿のみが出る祭りである。

中老が祭りの際に待機する場所は神社の社務所だった。鹿島踊を始める前に青年から中老に「今からかしまやります」とあいさつしにいった。

現在行われていない行事のひとつにハチハラエがある。これは、神輿の渡御が終わったあと、各家をまわって獅子舞を舞い、祝儀を集める行事である。とくに、新築、新婚の家

には必ず寄った。「おししーがまいこんだ あくまーをはいらしましよ」、「おししーがまいこんだ はらったーらかえりましよ」と囃した。獅子役以外の者は女装などの仮装をした。

現在、祭礼の際にオシシと呼ぶ獅子頭は宴会場に安置し、酒を置いて献杯している。

現在も巡行している山車は平成に入るところに神社横の大工が製作し奉納たものだが、

かつてはトラックの荷台に小屋掛けして山車にしていた。山車上では小田原囃子を演奏していたが、現在は屋台囃子をする者がいないため、テープで屋台囃子を流すだけになっている。

## (2) 外部公演等の上演機会

米神で初めて祭礼以外の場所で演じられたのは、昭和四八(一九七三)、四九(一九七四)年のことだという。会場は相模原市で、神奈川県で行われた鹿島踊の大会であった。また、昭和四七(一九七二)年に湯河原町桜木公園で行われた鹿島踊が一同を会し野外公演(詳細はコラム参照)にも出演している。

## (3) 継承への取り組み

『地震と戦争の記録 ふるさと米神』によると、昭和五四(一九七九)年に中老会を解散し、祭典実行委員会を設立した。祭典の準備や実施を各組により分けることでサラリーマンの参加を促し、鹿島踊に子どもを参加させた(鈴木、一九八二、一五三―一五四頁)。小学生の男女が参加するようになったのは平成一〇年ころからある。

三役などの踊りの中心的立場の若者はすでに米神から出た人が多く、米神出身者が里帰りして実施している。

## 5 その他

### (1) 参考文献

蘆田伊人編 一九七二『新編相模国風土記稿 二(大日本地誌大系二〇)』雄山閣

小田原市文化団体連絡協議会編 一九七六『小田原文化誌』小田原市文化団  
体連絡協議会

加藤恭兄編 一九五一『片浦村誌』神奈川県足柄下郡片浦村

神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課編 一九七三『神奈川県文化財圖鑑

無形文化財民俗資料篇』神奈川県教育委員会

神奈川県教育庁指導部文化財保護課編 一九七一『相模湾漁撈習俗調査報告

書』神奈川県教育委員会

鈴木康仁（代表編者）編 一九八二『地震と戦争の記録 ふるさと米神』米

神自治会、米神公民館

吉川祐子 一九八八『相模湾西海岸の鹿島踊―その諸相と宗教的機能―』『静

岡県史研究』四

(2) 古写真



写真1-5-7 青年団による鹿島踊  
(廣石計典さん提供 1970年ごろ)



写真1-5-8 集落内を練り歩くマンド  
(廣石計典さん提供 1970年ごろ)

(高久 舞・保坂 匠)

## 第六節 江之浦の鹿島踊

※江之浦の鹿島踊は平成二三年から中断しているが、聞き取り等により本報告書の調査項目を満たすことができたため、現行事例に準ずる形で第一章に掲載する。(編集註)

### 1 伝承地について

#### (1) 伝承地の概略

江之浦は小田原市の南部に位置し、東は相模湾、西は箱根山系に面し、北は根府川、南は真鶴町に接している。人口は、小田原市統計月報によれば、令和二(二〇二〇)年一月一日現在で二八六六(一一六世帯)である。かつて鹿島踊が行われていた大美和神社へは、小田原駅から車やバスで約二、三〇分、電車では東海道線根府川駅下車のちバスで約六分である。集落は、国道一三五号沿いと県道七四〇号沿いに集中している。

明治二二(一八八九)年の市町村制施行に伴い江ノ浦村(当時の表記)が発足したが、大正二(一九一三)年に石橋村・米神村・根府川村と合併して片浦村が発足、同時に江ノ浦村は廃止された。

#### (2) 暮らしの移り変わり

江之浦の地形は急峻だが、気候は温暖で蜜柑栽培が盛んに行われてきた。そして一部沿岸地帯では漁業で生計を立てている人たちもいる。『片浦村誌』によれば、片浦村では明治初年ころより蜜柑栽培が本格的に開始され、明治三〇(一八九七)年ころには温州蜜柑が栽培されていたようである。時代が進むにつれ一層栽培は盛んになったが、自身も蜜柑農家である昭和一三(一九三八)年生まれの男性によれば、昭和三〇年代ころが最盛期だったのではないかという。



写真1-6-1 大美和神社 (小澤撮影 2019年)

また、かつては石材業も盛んで、江戸城築城の際にも根府川石が使用された。『片浦村誌』によれば、「根府川には石の積出船があり、真鶴港を起点として江戸に通つた。その壯途を祝う鹿島歌は壯麗な踊りのリズムに乗つて、遠く波路を越えて江戸に向う船人の心をはげますに十分であつたらう」(加藤、一九五一、二三〇頁)とあり、石材運搬船の出航の際に鹿島踊が踊られていた可能性をうかがわせる。

#### (3) 神社の由来と伝承地の信仰

現地の案内板によれば、大美和神社の創建は寛文一一(一六七二)年八月一五日とされ、祭神は小彦名命と大物主命である。かつては蔵王神社であったが、昭和一八(一九四三)年に大美和神社に改称された。拝殿内には、「昭和十八年七月十五日 大美和神社改名記念」と記され、おそらく鹿島踊を写したと思われる写真が一枚飾られている。

大美和神社とともに鹿島踊が奉納されていた八王子神社の由来は定かではないが、昭和四四(一九六九)年に調査が行われた『相模湾漁撈習俗調査報告書』では、「今から95年程前、江の浦でボラアミを張った。この時、大漁であるようにと紀州から神様をもって来て祀ったのが起こりといっている。また、モグリさんが

紀州に引きあげようとした時、ここにとどまりたいと夢枕にたつたので以後ずっと祀っているそうである」(神奈川県教育庁指導部文化財保護課、一九七一、二二四頁)とある。また『昭和初期より江之浦周辺の今昔 道中便』によれば、「昔は、やはり病が続いたり、家族に不幸等あると各地よりお願い申しに祈り、赤い小旗を一本借りて、不幸が去るとお礼参り、其の節新しい旗を一本神に上げ、古い旗は鳥居脇の小屋に納めた」(森本、二〇〇九、六九頁)とあり、現在は海の神として信仰されているが、以前は疫病避けとしての信仰も篤かった様子がわかる。



写真1-6-2 八王子神社 (小澤撮影 2019年)

## 2 祭礼について

### (1) 祭礼名

大美和神社例祭

### (2) 期日

七月一五日 (現在は七月一五日に近い日曜日)

### (3) 祭礼の概要

祭日は七月一五日であるが、生活変化や少子化に伴い、昭和五〇年代から七月一五日に近い日曜日に行われるようになった。鹿島踊が中断してからは、大美和神社における神事と、氏子による抽選会などが主に行われている。なお、令和二(二〇二〇)、三(二〇二一)年は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、神事のみが行われた。

### (4) 祭礼の構成と進行

祭礼の担い手であった青年の減少などに伴い、鹿島踊の存続が困難になるうとした昭和五〇年代ころ、祭典実行委員制度が設けられた。現在の人数は八人で、宮総代一人とお宮の役員三人(会計・庶務一人、そのほか二人)が祭典を取り仕切り、残り四人は二、三〇歳代の若い人たちに実行委員を依頼する。宮総代の任期は七、八年である。

以下、令和元(二〇一九)年の様子をもとに現在の祭礼の流れを述べる。午前九時三〇分ころ、大美和神社では拝殿で神事の準備が行われる。普段拝殿内に納めてある神輿を軒下まで移動させるが、その際、かつて鹿島踊で使われていた幣束の柄を下に敷く。大美和神社の神輿は二基あり、軒下に移動させた神輿は櫓製で大正初期に造られたものである。もう一基は子ども神輿で、公民館二階のステージに飾る。子ども神輿も普段は拝殿に納めてある。氏子男性数名でこれらの準備



写真1-6-3 大美和神社拝殿と神輿 (小澤撮影 2019年)

備にあたり、同時刻には抽選会などを行う公民館二階の設営も行われる。なお、公民館は昭和四一（一九六六）年に建設されたもので、当時は一階を片浦農協江之浦支所、二階を公民館として使用していた。後述するが、公民館が建設されたことにより、かつて青年団が使用していた青年会場は「発展的解体」（高橋、一九八五、一三頁）された。

準備が整うと、一一時ころから拝殿内にて神事が始まる。大美和神社は小田原市松原神社の末社であるため、松原神社の神職による祝詞の後、宮総代や自治会長などが玉串を捧げる。神事の後は参列者による直会が行われる。

昼ごろから地域住民が公民館二階に集まり始める。一階には、かき氷などの販売や、子ども向けダーツなどが住民により開催されている。江之浦地区には平成三一（二〇一九）年三月現在で子どもは三人しかいないが、祭礼に合わせて祖父母の家を訪れる子どもたちもいて賑わう。

当日は雨天のため、一五時から二階ステージにて子どもたちによる囃子が披露された。楽器は太鼓（締太鼓五、長胴太鼓一）のみであった。晴天ならばトラックの荷台（現在の山車）に乗って地区内を回る。囃子はかつて高校生くらいの女性も含め、女性のみで行っていたこともあるが、その担い手も結婚などの事情によりいなくなり、現在は子どものみで構成されている。一六時より抽選会が行われ、お開きとなる。

### 3 鹿島踊について

#### (1) 由来と意味

鹿島踊についての詳しい由来や起源は明らかではないが、昭和一三（一九三八）年生まれ男性によれば、主に五穀豊穡や家内安全を祈願して踊ったという。また、海の神を祀るという八王子神社でも鹿島踊を踊ったが、

こちらは大漁や海上安全、疫病避けを祈願する信仰がある。

大美和神社の案内板によれば、「片浦地方は、通称根府川石と呼ばれる石材の産地で、石船（石材運搬船）にかかわる人達が多いことから、海や船、航海に関係のある鹿島信仰が定着し、鹿島踊りも伝えられたものである。しかも鹿島踊りは、村に入ってくる悪疫も退散させる効果のある踊り故、村の若い衆によって伝承されてきた」とある。

#### (2) 踊り手とその組織

踊り手は、三役（コガネビシヤク一人、日月の描かれた軍配二人）、ナカオドリ（太鼓一人、鉦二人）、モドリ二人、そのほか基本的に役のないシラツペで構成されていた。踊り手以外には、上の句を唄うウタアゲが五人ほどおり、正面右手が立ち位置だった。警固はいなかったというが、『小田原文化誌』では「警備4」（小田原市文化団体連絡協議会、一九七六、二〇五頁）、「相模湾西海岸の鹿島踊―その諸相と宗教的機能―」においても「警備4」（吉川、一九八八、四五頁）とされているが、それ以上の詳細は不明である。

青年が踊りの主体だったころ、三役は青年団入団五年目くらいのいわゆる中堅から選ばれた。明確な選考基準はなく、先輩から指名されたり、そのときの流れで決めたりした。青年団が解団してからは、四、五〇歳代の人から選ばれた。踊り手の減少に伴い選ばれる年齢も上昇した。

ナカオドリは、シラツペを経験して二、三年ほど経過した人から選ばれた。こちらも明確な選考基準はなかったが、太鼓なら体格の良い人、鉦なら小柄な人が選ばれる傾向にあった。三役と同様に、先輩から指名されることもあれば、同じ人が長く続けることもあった。

役の交代について、昭和一三年生まれの男性によれば、彼が踊りを習い始

めたころの先輩の話では役の交代はなく、男性のころになると最初から最後までトオシで踊るときには交代があったという。歌詞と隊形変化については後述するが、メイデン（明殿）のみしか踊らないときは交代しなかった。また、昭和二八（一九五三）年と同三七（一九六二）年生まれの男性の話では、太鼓三人、鉦四人で交代したという。交代があった場合、太鼓の交代箇所は歌詞の中で「天竺は、ちかいな女郎」で列形になる前と「十七が、沢におりて」の前の二度、鉦の交代は「天竺の雲のあいから」で円形に戻る前の一度だった。シラッペの中にはこの交代要員も含まれていた。

モドリは隊形変化の際に声をかけるリーダー的存在で、中堅の人から選ばれた。これも特に選考基準はなかった。青年団入団一年目は役のないシラッペだった。

ウタアゲは、前任者から鹿島踊という伝統芸能を正しく伝承してくれそうな信頼できる人に依頼されていた。ウタアゲは鹿島踊の上の句を唄うということのほかに、踊りが正しく伝承されているかをチェックするという大事な役割があった。ヨミヤ（宵宮）の二日前には必ずセイゾロイ（勢揃い）があったが、これはその年の踊りの総仕上げをウタアゲが厳しく検査する場であった。

### （3）衣装

踊り手は基本的に全員同じ浴衣を着用した。ナカオドリはたすき掛けをして、顔を白く塗り、紅もつけて化粧をすることがあった。三役はしなかった。昭和一三年生まれの男性によれば、彼がウタアゲになったころ（昭和四〇年ころか）に少し下の世代が化粧をしていた。化粧は必ずするものではなく、遊び感覚だったという。

昭和五九（一九八四）年七月にテレビ神奈川で放送された「ふるさと再発見」では、八王子神社前の広場で踊る様子が撮影されている。広場は神社より低い場所に位置するため、神社側の壁際に神輿が置かれ、その前で二重の輪になって踊っているが、残念ながら隊形変化の様子は放送されていない。

人数は大人が五人ほど、子どもが二〇人ほどである。大人は、基本的に白地に紺の直線模様が入った揃いの浴衣に地下足袋を履いている。ナカオドリは全員化粧をしているとみられ、ピンク色の紐をたすき掛けにし、浴衣の裾は端折り、ピンク色の鉢巻を巻いて水色の手甲をしている。三役はたすき掛けも鉢巻も手甲もしていない。シラッペの中には、ピンク色の紐をたすき掛けにして水色の手甲をし、ピンク色の鉢巻を巻いている人もいればそうでない人もいるし、化粧をしている人もいる。化粧に関してだが、昭和三七（一九六二）年生まれの男性の話では、毎年ではなく三、四年だけやっていた期間があったとのことで、そのときの雰囲気にも影響されるものであったとも考えられる。

子どもは男女共に水色の揃い半纏に私服の短パン、靴下にスニーカーである。半纏の襟には「子供連」の文字があり、背中には赤色で「祭」と染められている。首からはピンク色の紐を下げて結んでいる。シラッペと同様に右手に日の丸の描かれた扇子、左手にシラッペ（後述）を持ち、大人の列の外側で踊っている。

ウタアゲはこのとき九人で、神社を正面にして右側に立ち、踊りの輪の方を向いて平行に並んでいる。ウタアゲは白緋にしごき帯を締め、黒の羽織りを着用している。

(4) 採物、楽器

採物や楽器の色の塗り直しなどの準備は祭礼の四、五日前から行った。これらは祭礼が終わるとそのまま保管した。現在でも大美和神社拜殿内や公民館に保管してある。

**コガネビシヤク** 円形で、ほかの道具を作り直した際に出た紙を細かく切つて中に入れた。昭和二八(一九五三)年生まれ男性によれば、この紙は「紙吹雪」と呼んでいたのではないかという。コガネビシヤク本体には金の色紙を貼り、縁には金、赤、緑の色紙を短く長方形に切つたものをふさふさと付けた。また、中心からジグザグに切り抜いたボール紙の蓋をはめて中の色紙の出方を調整した。柄はらせん状に銀、金、赤色の順で塗り、麻紐を巻き付けた。下部には金、赤、紫の色紙を束ねて付けた。この麻紐は、踊るときに伸ばした方の片手で持った。

**軍配** 軍配は日月各一本で、日は金地に赤い日の丸、月は銀地に金色で月が描かれている。柄と麻紐はコガネビシヤクと同様である。柄の上下には金や緑の色紙を切つて束ねた房を付けた。裏はともに銀地で、金色で「天下泰平」の文字を書き、赤色で縁取りしている。コガネビシヤクも軍配も毎年ペンキで塗り替えた。

なお、軍配について『神奈川県文化財圖鑑』によれば、「江ノ浦は日形一本だったが、十余年前から月形を加え、二本になった」(神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課、一九七三、一五六頁)とある。

**太鼓** 太鼓は締太鼓で一個七、八kgほどである。キラキラしたモールのようなもので縁を飾った。太鼓は叩く面を外側から金、銀、赤色で、側面を赤、黒、赤色で毎年塗り直した。紐は締め直して持ちやすくしていた。紐の通し穴には、緑、赤、金の色紙を束ねた房を付けた。

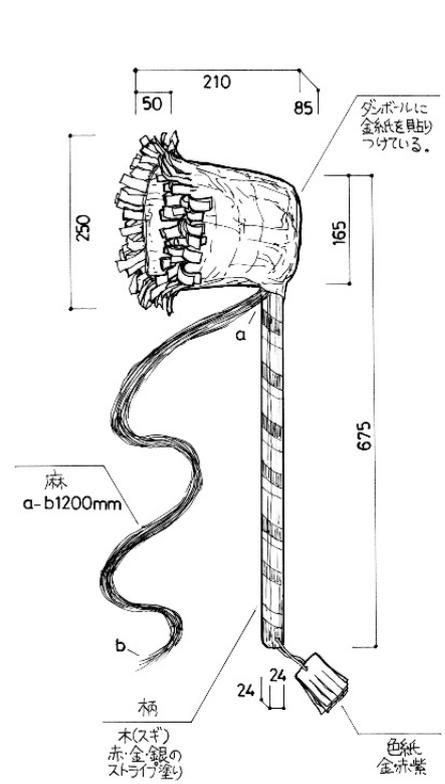


図1-6-1 コガネビシヤク

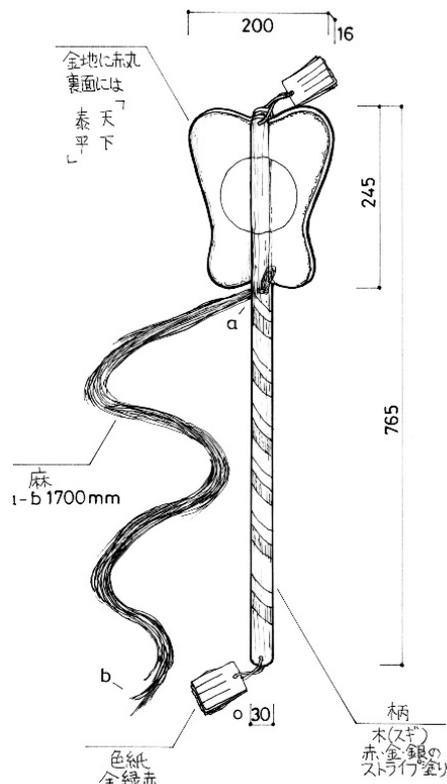


図1-6-2 軍配(日)

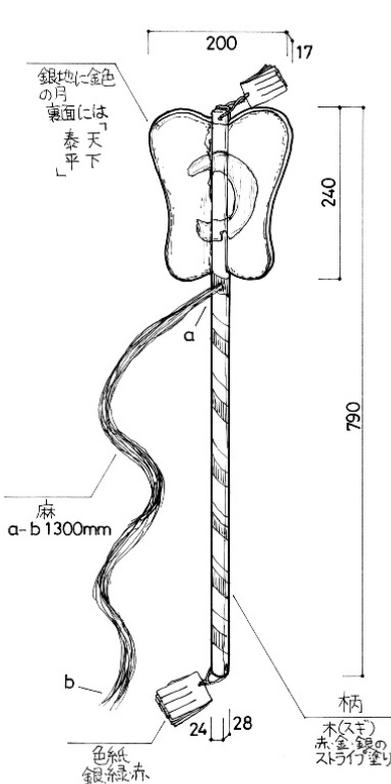


図1-6-3 軍配(月)

太鼓の撥は緑、金、赤色でらせん状に塗られており、叩く側の先端に金、赤、緑、持ち手側の先端に緑、銀、赤の色紙の房を付けた。鉦 内側の脚を三角形にたこ紐で結び、三ヶ所に金や青、緑、赤の色紙の房を付けた（写真では二ヶ所のみ）。鉦は割れやすいので毎年買い足しており、いくつも予備があった。

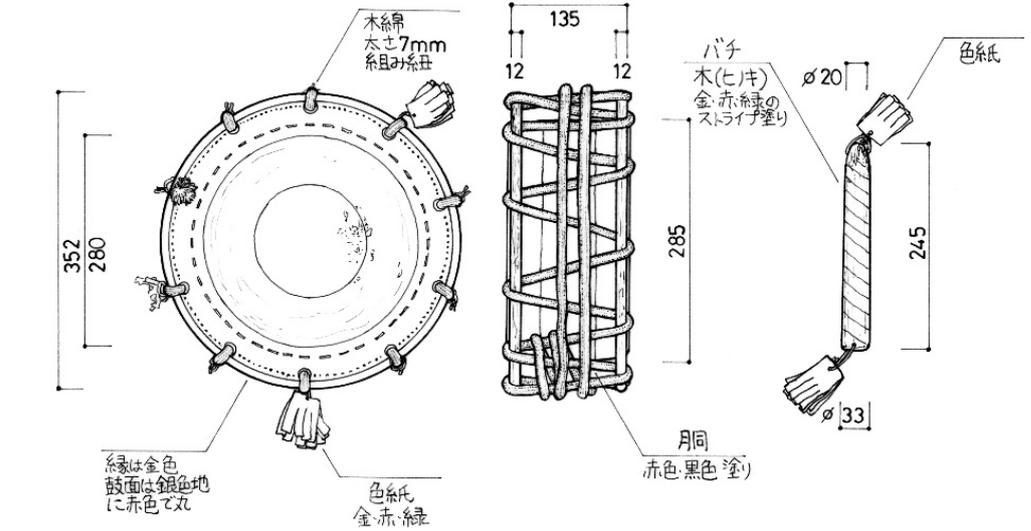


図1-6-4 太鼓と撥

鉦を叩く撞木は、叩く部分を手は酒樽を再利用していたこともあった。堅い木だと鉦が割れてしまうため柔らかいホオノキを使用した。その分撞木の方が割れやすくなるため、踊る際には予備を一本帯に挟んでおいた。毎年一人につき三本作り直した。昭和三十七年生まれ男性の話でも、撞木は材料がなくなると山に取りに行ったという。おそらく昭和六〇年ころのことである。撞木は全体を金、赤、緑色でらせん状に塗り、叩く部分の両端には金や銀、緑、赤、柄の下部には金、緑、赤の色紙の房を付けた。

シラツペ 基本的に役のない踊り手をシラツペと呼んだが、彼らが左手に持っていた、柄の先に白色の幣束を挟んだ棒のことも「シラツペ」と呼んだ。

柄は円柱で、素材はラワンと見られるものもあるが、おそらくさまざまである。長さや太さに差があるのは作った時期の違いで特に意味はなく、消耗したら補充するので毎年交換すること

はなかった。昭和一三年生まれの男性の話では、小田原の木屋に補充してもらっていたという。踊り中、肩にあてて滑らせるようにするため柄に紙を巻いてい

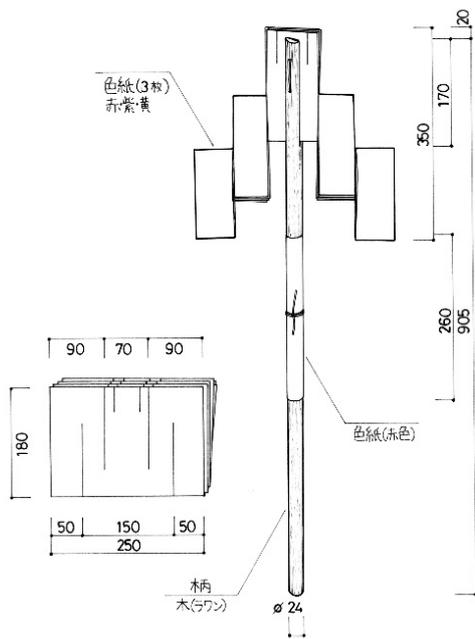


図1-6-6 シラツペ

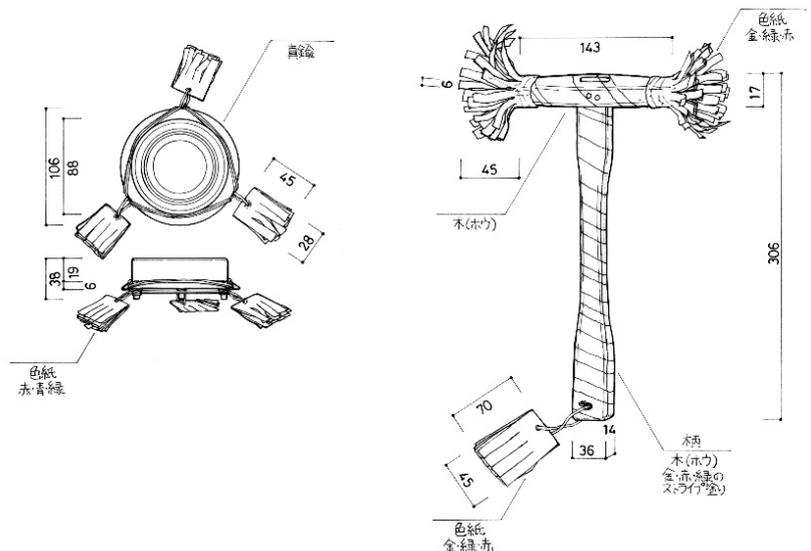


図1-6-5 鉦と撞木

たが、当日は汗で全く滑らなかつた。

**モドリの採物** モドリは、表側に紫色、内側に黄色の幣束を重ねて柄の先端に挟んだ棒を持っていた。これには「シラツペ」のような名称はなかつた。

**ウタアゲの採物** ウタアゲは片手に日の丸扇子、もう片手に表側に赤色、内側に青や黄色の幣束を重ねて柄の先端に挟んだ棒を杖のように持っていた。

これも特に名称はなかつた。モ

ドリやウタアゲが持つ棒も、柄

にそれぞれ紫と赤の色紙が巻いてあつた。いずれの幣束も柄の

先端に切り込みを入れて挟んだ上でたこ紐でくくり、挟んであ

る脇を蛇腹に折つた。

**扇子** ナカオドリ以外、白地に

日の丸を描いた扇子を片手に持つて踊つた。扇子は毎年一本

貰えた。鹿島踊の練習の総仕上げであるセイロイのときは予

備の道具を使用していた。

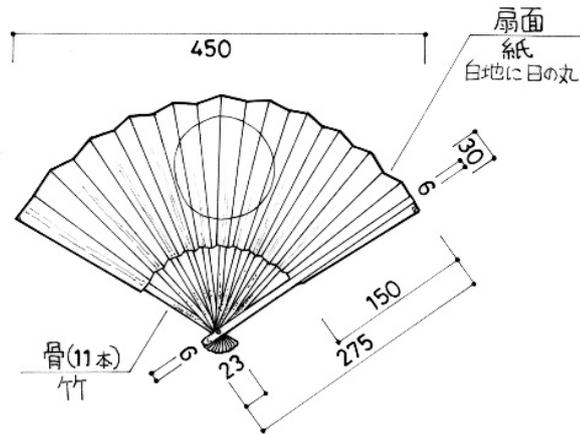


図1-6-7 扇子



写真1-6-6 シラツペ  
(小澤撮影 2019年)



写真1-6-5 軍配 (月・日)  
(小澤撮影 2019年)



写真1-6-4 コガネビシヤク  
(小澤撮影 2019年)



写真1-6-8 鉦と撞木 (小澤撮影 2019年)



写真1-6-7 太鼓と撥 (小澤撮影 2019年)

(5) 歌詞

大美和神社では、祭礼当日に拝殿に向かって右側の石垣辺りに歌詞を書いた大きな板を掛けた。ここではその歌詞を掲載する。なお、口上は昭和二八(一九五三)年生まれの男性によるものである。

神々のいさーみなればーミロク踊りのめでたやーし

まことやら、鹿島の浦に、

みろく御舟が、ついたとやら。

ともえには、伊勢と、春日の

中は、鹿島の、御社。

鹿島では、稚児が、おどる、

ごまん堂では、護摩をたく。

その護摩を、何とたきそろ。

日本つゞきの護摩をたく。

天竺は、ちかいな女郎

たゝらたゝら、あれたたら、あれふもがえあれきこゆ。

そのたゝらを、何とたきそろ、

たたら、たたら、あらたゝら、あとやつにふむ。

天竺の雲のあいから、

十三小姫が、米をまく。

その米を、何とまき候。

日本つゞきの、米をまく。

十七が、沢におりて、

黄金びしゃくで、水をくむ。

水くめば、袖ぬれる、

たすき、かけそえあいな十七。

鎌倉の御所の御庭で、

十三小姫が酌をする。

酒より肴よりも、

十三小姫が、目につく。

目につけば、つれてごじやれよ、

お江戸、品川、あの果てまでも。

次に、昭和一三年生まれの男性所有の歌詞プリントより、ウタアゲの唄つた上の句の歌詞を掲載する。

【メイデン(明殿)】

マコトエヤアーラーナーエーエカーエンエエーセーマアノーウーエンエ

ラーシコーオーニヨオエ

誠やら鹿島の浦に

ヘヤートーモーエーニイワーナセートカエンエーエスナーニヨオーエ

へや ともえには伊勢と春日の

カセーマーエディワーナーエーエチエーンエエーゴオドルエーンエーエル

ソーオニヨーエ

鹿島では稚児踊る

ヘヤーソーノゴーオマアオーナエートターエンエエキーソーオニオーエ

へや其のごまを何とたきそうにとたきそう

【ジュウシチ（十七）】

テンジークウカーナーエチエンエエーセアーイーナーエンエージーヨ  
ロオニヨーエ

天竺が近いなあ女郎

ヘヤーソノターエエラーオーナエードターエンエーキソオニヨーエ

ヘや其のたたらを何とたちそうにとたきそう

テンジークウノナーエエクエエエーノアーイーエンエーエカラーニ  
ヨーエ

天竺の雲のあいから

ヘヤーソノヨーオメーオーナエートターエンエーエキソオニヨーエ

ヘや其の米を何とまきそう

ジウーシイチイナーナーエエサーエンエエーワワーニーオーエンエーエリー  
ソオニヨーニ

十七が沢に下りて

ヘヤーニーズクウメエーバーナーエノガヌーエンエーエルソーオニ  
ヨーエ

ヘや水汲めば袖ぬれる

【カマクラ（鎌倉）】

カマークウエーラーノナーエエゴエーンエエーショワーノニーエンエー  
エラシコオーニヨーエ

鎌倉の御所のお庭に

ヘヤーサーケーヨリイモナーエートサーエンエーエリモナーニヨーエ  
ヘや酒よりも肴よりも

メーニーツエカーバーナーエエツエーンエエーデーゴエンエザレ  
ツオーニヨーニ  
目につかばつれてござれよお江戸品川

昭和一三年生まれの男性によれば、最初の「まことやら」から「たたら、  
たたら、あらたゝら、あとやつにふむ」までを「メイデン（明殿）」、「天竺  
の雲のあいから」から「たすき、かけそえあいな十七」までを「ジュウシチ  
（十七）」、「鎌倉の御所の御庭で」から最後までを「カマクラ（鎌倉）」と呼  
んでいたという。しかし、プリントでは「ジュウシチ」は「天竺は、ちかい  
な女郎」から「たすき、かけそえあいな十七」までとなっており、またある  
いはジュウシチは最初から「黄金びしゃくで、水をくむ」までだったという  
話もあり、時期により変化があったとも考えられる。

(6) 全体の流れ・道程（主な踊りの場）

参加人数の減少とともに次第に踊りも省略されるようになり、一五当日  
は大美和神社と八王子神社で「メイデン」を踊るのみになった。かつては式  
典後の午前一〇時ころに「オメザメ」と称してトオシで一度、また午後四時  
半ころに「オサメ」と称してトオシで一度踊られていたが、最初から最後ま  
でトオシで踊れたのも、子どもの参加人数が多かった二〇年以上前ではない  
かということである。『城下町の民俗的世界―小田原の暮らしと民俗―』に  
よっても、おそらくだがトオシの「オメザメ」は昭和五八（一九八三）年ま  
で踊られていたようである（西海、二〇一四、六六八頁）。青年が減少して  
も子どもが多かったため鹿島踊が継続できたが、中断したところになると、ナ  
カオドリに加えて大人三、四人、子どもが一〇人弱ほどとなっていた。なお、

かつての様子については後述する。

(7) 踊りの所作と隊形変化

江之浦の鹿島踊は、円形から列形、列形から円形へと隊形変化した。それぞれの隊形に名称はなかったため、ここでは円形、列形と表記する。円形るときは中心にナカオドリが三角形に立ち、その周りを人数により一、二重の円で囲み、時計回りに回った。三役は隣同士で立ち、モドリは対角線上に立っていた。三役のうちコガネビシヤクとモドリの一人は隣り合っていた。円が二重のときには三役は内側の円に混ざっていた。列形るときも、全体の人数により三列もしくは五列で、太鼓が最前列中央、その後ろに鉦二人、その後

ろに三役（コガネビシヤク・軍配（日）・軍配（月）、太鼓の両脇にモドリ、モドリの後ろにシラツペが続いた。

昭和五九（一九八四）年生まれの男性によれば、踊りの最初はナカオドリ三人が直線に並び「ハイヨー、タタタン、タタタン、タタタン」と楽器を叩き、「エーイヤーサ、ちはやふるー」で、それまで周りで立っていたほかの踊り手は外向きに座った。それから「かーみがみのー」と口上が始まり、最後の「めでたやーし」で全員立ち、「アーンソレー、ハ」で踊りが始まったという。

昭和一三年生まれの男性によれば、隊形変化のときはどこにいても「イトニトサント」とスキップするような足取りで動いたという。隊形変化は歌

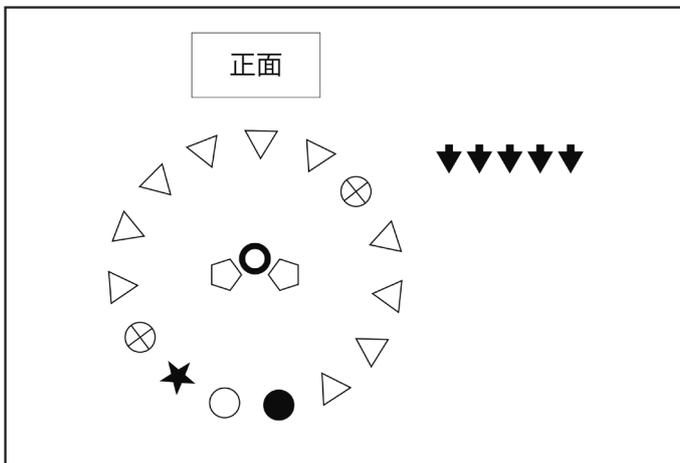
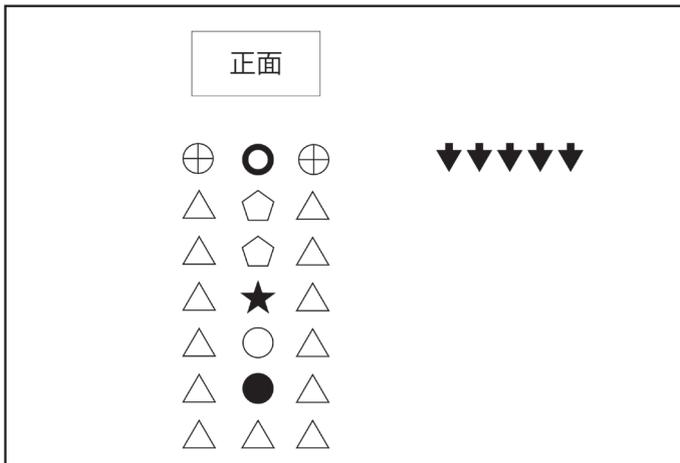
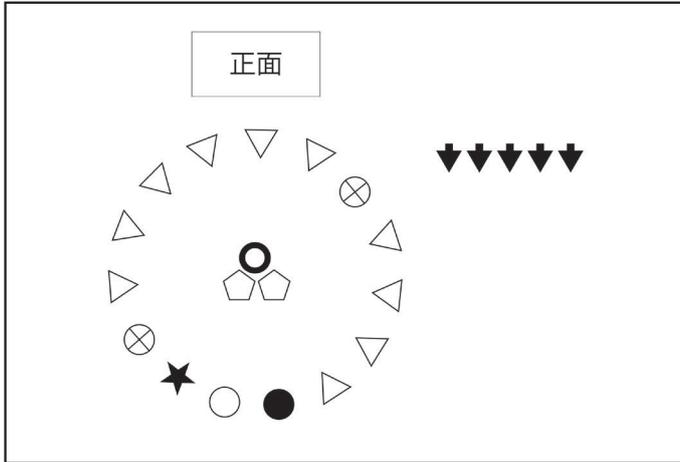
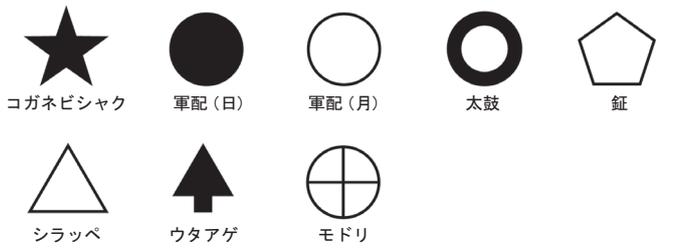


図1-6-8 江之浦鹿島踊隊形図

詞の中の「テンジク」の箇所、モドリ同士が合図して「テンジクー！」と叫んで隊形変化した。一度目の「テンジク」で列形になり、二度目の「テンジク」で円形に戻ったが、「メイデン」しか踊らないときは列形にはならなかった。

一方で、昭和二八年生まれの男性や昭和五九年生まれの男性によると、モドリ二人が「オヘヤーアソソコ」の掛け声を発すると、モドリ一人とその隣の三役と、もう一人のモドリの位置のみ入れ替わったという。掛け声の場所は歌詞の中で決まっていた。後者の男性は小学生のころから踊りに参加していたが、「テンジク」で隊形変化した記憶はあまりないという。そのほかにも、「オヘヤ」は三役のかけ声で二、三回あったという話もあり、時代や参加人数によりさまざまな変化があったのではないかと考えられる。

#### 4 伝承内容の変遷

##### (1) 伝承の基盤、背景、生業

江之浦での鹿島踊は、かつては青年団を中心に行われていた。以下、昭和一一三（一九三八）年生まれの話を中心に述べる。

**青年団** 青年団には中学を卒業して入る人（二五歳）、大学を卒業して入る人（二二歳くらい）もいたが、大半は高校を卒業して入る人（一八歳）が多かった。入団後約一〇年間の前半五年間は、合宿部といって青年会場（公民館）に毎日合宿した。新入団者の指導などは合宿部が担っていた。入団時はオヤ（保証人）を立てた。オヤは仲人親のような感覚で、実の両親が信頼できる人を選んだ。鹿島踊で着用する浴衣地を購入する資金もオヤが用意してくれた。青年団の拠点となる青年会場は、大美和神社から下って県道七四〇号と合流する南西の角にあった。『江之浦部落史』によると、青年会場が建

設されたのは大正一三（一九二四）年二月二七日のことで、関東大震災からの復興拠点にするためだったという（高橋、一九八五、一七頁）。

**鹿島踊の練習** 青年合宿部は、祭礼の一月か一月半ほど前から、仕事を終えて各自宅で夕飯を済ませた後、青年会場の掃除をして、一九時ころから青年会場や神社で毎日みっちり練習をした。青年会場の掃除は入団一年目の一番組の役目だった。多いときには総勢三〇人ほどで踊ったが、練習するのは一五人ほどだった。経験を積んだ三役などは練習する必要もなかったためである。教えるのは入団五年目の一番組だった。それより年長者が教えることはなかったが、セイゾロイと祭礼においての鹿島踊では青年団全員が踊った。

**囃子と屋台** 青年団時代は、屋台囃子も青年で務めた。囃子の練習を神社の濡れ縁で行い、その後境内で鹿島踊の練習をした。青年で囃子を務めていたころは、屋台に乗ったり、後述する海上パレードの船の上でも太鼓を叩いたりもした。当時は囃子の乗る二階建ての立派な屋台があり、各階四、五人乗れた。『昭和初期より 江之浦周辺の今昔 道中便』によれば、この「屋台（山車）は吉浜の（ヨッサン）が造ったもので彫物も立派なもので入口の登り龍、下り龍なぞ子供のころは恐ろしかった出来で、又左右の格子も頑丈に出来ていた」（森本、二〇〇九、六七頁）という。しかし、人力で坂道を引くことに労力を要することや、交通事情の変化などにより、おそらく昭和三〇年代半ばころ、海岸で壊して燃やしてしまった。

同書によれば、現在の屋台は祭典実行委員を設けたのと同時期（昭和五〇年代ころ）に造られたようで、「トラックに屋根付きの山車を作り、提灯をかざり、村中走らせ、娘さんに太鼓を夜る習はして祭り（ママ）を賑わしてもらった」（森本、二〇〇九、六八―六九頁）とある。

ヨミヤ 七月一四日はヨミヤで、日の出前の朝五時ころに青年が幟を立てた。幟は青年会場の向かいと、現在の江之浦公民館から少し真鶴方向に寄った所の二ヶ所に立てていた。現在は後者のみクレーンを使用して立てており、前者の場所には鉄板が被せてある。青年団時代は、必要な角材の運搬も、幟を立てるのも全て人力で行った。幟の飾り付けは宮総代が行っていた。

昭和二八（一九五三）年生生まれの男性によれば、ヨミヤでは大美和神社でトオシで一度踊ったが、ヨミヤで踊ったのはおそらく一〇年ほど前が最後で、中断を決めた平成二三（二〇一一）年は踊らなかった。現在ヨミヤでは宴会のみが行われている。

祭礼当日 一五日の祭礼当日は、昭和二三年生まれの男性によれば、午前一〇時ころに式典があり、その後大美和神社にて最初から最後までトオシで踊った。これを「オメザメ」といった。それから昼ころに江之浦漁港近くの八王子神社でもトオシで踊った。八王子神社へは、公民館を過ぎた先から海の方へ蛇行して続く道を下って行った。八王子神社でも境内で踊るのが本来だが、狭くて道路にはみ出すため前の広場で踊った。昼食は漁協がおにぎりなどを用意してくれた。そして午後四時半ころ「オサメ」と称して大美和神社でトオシで踊った。「オサメ」の前には公民館で祝宴を開いた。

昭和二八年生まれの男性の話では、四〇年ほど前には、かつてトオシで踊っていた「オメザメ」が「メイデン」部分に省略されたためか、「メイデン」のことを「オメザメ」とも言っていたという。また、八王子神社では最初から「黄金びしゃくで、水をくむ」までの「ジュウシチ」を踊った記憶がある一方で、「オサメ」は変わらずトオシで踊っていたということからも、時代による変遷がうかがえる。

祭礼当日は、青年団は青年会場、中老は大美和神社手前にあった保育園、

それ以上の年長者は自治会長宅に集合していた。鹿島踊を始める前には青年会場で少し酒を飲み、ときには化粧もした。神社に向かうときは鉦を「チャンチャンチャンチャン」と鳴らしながら、「ハイヨー（チャンチャンチャンチャン）」と言い続け、特に列を作ることなくただ歩いて行った。踊り手は扇子を広げて胸で軽く叩くように拍子を取りながら歩いた。神社に到着するとそのまま円形の隊形になり、ナカオドリが「さあ、やるべや」などと小声で言いつて始まった。

踊りの始め、ナカオドリは円（三角形）のようになって座っており、そのほかの踊り手は立って周囲を回っている。ころ合いを見て、ナカオドリは太鼓を先頭にする形で三人一緒に片足を一步前に出して体勢を低くし、三人で「チャンチャチャン」とそれぞれの楽器を叩いた。それからおそらく片膝をつき、「かーみがみのー」と口上を三人で言い、最後の「めでたやー（し）」で立ち上がりナカオドリは円（三角形）になった。その後ウタアゲが上の句を唄い出した。上の句と下の句とでは節回しが異なり、男性曰く上の句の方が風格があるという。

一五日朝の大美和神社での「オメザメ」と昼の八王子神社の間では、青年会場の前で「メイデン」のみを踊ることもあった。この場合隊形変化はななく円形のみで踊った。参加者が多かったころは、天正庵跡や幟などを寄付してくれた人の家の前でも踊ったこともあった。このころは、一四日と一五日とも踊る前にはウタアゲのところを青年が二人で「これから始めますからよろしく願います」と挨拶に行った。鹿島踊を中断するころには電話や地区内放送での連絡に変化した。

神輿 祭礼当日神輿を担ぐのは青年を抜けた中老だったが、人数が減少してきてからは青年も手伝っていたし、祭礼当日の「オメザメ」の後、青年で神

輿を担いでいたこともあった。踊り手と神輿は大美和神社と八王子神社で踊るとき以外は別行動だった。自治会長の家に担いで行ったこともあったし、神輿を海に入れたこともあった。

しかし、神輿が重すぎて危険なため昭和四〇年始めころには担がなくなり、以降は車に載せて八王子神社まで運んでいた。担がなくなってからも毎年磨き、現在は祭礼当日に大美和神社拜殿に据え置くのみとなっている。大人が担いだ神輿のほかにも、小学校四〜六年生が担ぐ子ども神輿があり、さらに小学校一〜三年生が担ぐ樽神輿もあった。樽神輿は、台に竹を二本縛り、紙の花をつけたものを毎年作製した。子ども神輿は櫛製で、五、六年前（二〇一四年ころか）に担ぐのをやめた。子ども神輿は、『江之浦部落史』によれば昭和初期に製作されたようである（高橋、一九八五、一一〇頁）。現在は祭礼当日に公民館二階のステージに飾られるのみである。樽神輿も二、三年前に担ぐことをやめ、当日は一階に飾られる。

**担い手の減少** 昭和四〇年代ころまでは一八〜二九歳くらいの若者が主な踊り手だった。青年団を退団した後には中老となったが、昭和四〇年代ころになると中老という立場はなくなっていた。中老より年長の人々に対しての特別な名称はなかった。男性が青年を抜けたときには既に中老という立場はなく、その後数年でウタアゲを依頼され、鹿島踊の中断まで務め続けた。ウタアゲには定年はなかった。青年団の解団はおそらく昭和五〇年代末〜六〇年代とみられるが定かではない。

昭和三七（一九六二）年生まれの男性の話によれば、ある年青年が五人しかおらず、鹿島踊の継続が困難な状況に陥りそうになったことがあるが、幟立てから踊り、囃子まで全て五人でやりきったという。だが、最後は青年が三人になり、さすがに青年だけではできなくなった。そのころには青年団〇

Bであるかつての中老にも声を掛けていたが、最後は声を掛ける相手自体がいなくなった。

**子どもの参加** 昭和二九（一九五四）年生まれで当時青年団長を務めていた男性によれば、解団前の昭和五〇年代ころに、青年もかつての中老もその立場のくくりをなくして、祭典実行委員制度を新たに設けた。そのころに子どもも鹿島踊に参加させようということになった。昭和五五（一九八〇）年生まれの男性の話によれば、子ども会で踊ったが、当時は子どもが大勢いたため低学年のときは踊れず、四年生になってからようやく踊れたという。人数が多いときには、子どもも含めて三重の円で踊ったこともあった。また、昭和五九年生まれの男性も、小学生のころに子ども会で踊っており、当時はカセットテープに録音したもので練習していたという。同級生は七人くらいおり、中高校生になると踊らなかった。当時は小学校から帰宅して夕食を済ませた後、一時間ほど公民館の二階で練習した。毎日ではないが、一、三週間は練習した。その際、練習後に大人がアイスを用意してくれたのが印象に残っているという。

## （２）中断の背景

かつては青年団により受け継がれてきた鹿島踊だが、参加者が次第に減少したことに加え、平成二三（二〇一一）年に発生した東日本大震災による計画停電やさまざまな活動自粛の影響を受け、江之浦では鹿島踊の中断に至った。

鹿島踊を中断する以前は、海上パレードも行われていた。海上パレードは昭和五〇（一九七五）年ころ始まったようである。八王子神社での鹿島踊の終了後、江之浦の漁師が大漁旗を掲げ、最も大きな船に子ども神輿を積み、

太鼓を叩きながら江之浦海域内を三、四〇分パレードした。多いときには一〇艘ほどの船が参加した。この船には観客も乗せていたが、救命胴衣着用の準備など安全面での負担増加などの諸事情により平成二二（二〇〇九）年に中止に至った。

株式会社

吉川祐子 一九八八「相模湾西海岸の鹿島踊―その諸相と宗教的機能―」『静岡県史研究』四

（小澤葉菜）

## 5 その他

### （1）参考文献

内田一正 二〇〇〇『人生八十年の歩み・内田一正』内田昭光（私家版）

小田原祭禮研究会編 二〇〇四『小田原の祭り―人と心と夢からのメッセージ―』株式会社アルファ

小田原市文化団体連絡協議会編 一九七六『小田原文化誌』小田原市文化団体連絡協議会

加藤恭兄編 一九五一『片浦村誌』神奈川県足柄下郡片浦村

神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課編 一九七三『神奈川県文化財圖鑑 無形文化財民俗資料篇』神奈川県教育委員会

神奈川県教育庁指導部文化財保護課編 一九七一『相模湾漁撈習俗調査報告書』神奈川県教育委員会

高橋大次郎 一九八五『江之浦部落史』（私家版）

西海賢二 二〇一四『城下町の民俗的世界―小田原の暮らしと民俗―』岩田書院

浜田和政 一九九五「小田原地方の神社祭礼について（調査報告）―近・

現代における祭りの形態とその変遷―」『小田原市郷土文化館研究報告』

三一

森本岩吉 二〇〇九『昭和初期より 江之浦周辺の今昔 道中便』大和印刷

## コラム1 民俗芸能および文化財に関する公的広域調査 が有す意義について

平井倫行（相州真鶴貴船神社 権禰宜）

今回、神奈川県主導による鹿島踊の大規模な公的民俗調査が実施され、その現地調査員として、事業の一端に関与をさせていただいた。

本事業は、神奈川県西部から伊豆半島沿岸に継承されている民俗芸能「鹿島踊」の現状記録を目的として行われたもので、従って、その工程は各地域、同時並行的に展開され、その研究状況を相互に共有しつつ進行される、広域連携調査の側面を強く有した事業であったと述べる事が出来るであろう。

筆者が調査にあたったのは、自身が故郷として生まれ育ち、また現在、神職としても奉職をしている神奈川県真鶴町鎮座の貴船神社と、その夏の例祭として、国指定重要無形民俗文化財にも指定されている「貴船まつり」の行程に組み込まれた民俗舞踊「鹿島踊」であり、この様な形で、まさに学術的、研究史的視点から、当地の祭礼や芸能に向き合う事は、一個人としても、得難い経験であった。

こうした調査事業が有す意義や目的とは無論、その対象となる民俗事例や文化財の現状を客観的なるものとし、以後の研究、また現地においては、その継承の為の情報を保存、管理するのを合理ならしむ事にこそ、第一義的なものが存在するのは明白であるが、しかし、こうした大規模な公的動員は、他方、そのみにはとどまらぬ、副次的、かつ有為な成果をも、多くもたらすものと考ええる。

事情に即した、ごく具体的問題として、一般的規模の民社（親族単位にて

奉仕、継承されている神社）において、平常社務の過程における収蔵資料の検証や、未整理資料の研究といった作業は、人員的にも時間的にも極めて困難な課題に属している。

しかしながら、このような公的事业による調査の機会により、いわば外側からの動議が生ずる事になるのであれば、社としては、その対応の必然性が生じて来る。

今回の事例の場合、研究の必要上から、当社資料室に収蔵されていた古文書類や、旧所蔵物などが社内にて再調査され、その中からは、貴船まつり（と鹿島踊）に関する現状、最も古い部類に属す刊行物が発見され、それが新たな研究材料として活用される事となった（「真鶴町 郷社貴船神社 例祭御輿渡御式次第書」昭和一五年四月発行）。のみならず、鹿島踊の情景をも含む、当地古写真群の整理、デジタルデータ化、また特筆すべきは音声資料「鹿島歌」（昭和三四年七月二十七日録音）の発見であり、旧媒体で、しかも保存状況も最善とはいえぬ資料が、調査という一つの目的意識を共有する中で、同じく現地調査員の高久舞氏のご仲介のもと、東京文化財研究所により修復をされた。

この資料は結果、同管轄の新たな研究史料としてアーカイブへと組み込まれ、広く有志の方々に公開される流れとなったのも、誠に喜ばしい事である。この様に、それが例え如何なる機会であれ、ある一定の目的意識のもとに実施される文化事業や、相応の広がりや有す調査体制の連帯は、各地域の情報、技術的ノウハウの連携、組織形態や、またその運営上の合理における共通認識の形成、同一目標に対する行動指針や問題意識の交換など、様々な面において、主たる研究対象へのアプローチの傍らに、実に豊かな副次的効果を生ぜしめる。

その意味においても大切なのは、こうした公的調査の、ある年限における計画的更新や再実施、あるいは、これほどの規模でなくとも、地域や事例の経過に絞った追跡調査や再収録などは、民俗や文化財の継承の実態を外側から補足し、また伝統そのものの価値を、内外との客観的聯絡のもとに意義付ける、大きな契機ともなるであろう。

現在、各地域における伝統文化や民俗芸能の継承・保存は困難な時局にあるが、しかしながら、今回生じた如き交流と、現場レベルにおける人的ネットワークの構築、事業達成に向けられた具体的協調の中に育まれた信頼関係は、本事業の調査結果、研究報告と共に、今後の得難く、貴重な財産となるであろう。

本調査事業の完遂を、心より寿ぐものである。